『人文学報』第120号（2023年２月）
（京都大学人文科学研究所）

資料紹介

「幕末明治巷談絵噺」
――幕末・維新期京阪地域の一「風景」――

齊藤紅葉・桑原優子[*1][*2]
林潔・西脇彩央[*3][*4]

本稿では、京都大学人文科学研究所図書室所蔵の「幕末明治巷談絵噺」全二冊（以後、「絵噺」と略す）を翻刻・写真とともに紹介する。「絵噺」は、一九六六年五月三一日付で同図書室が受け入れた資料で、当時、京都大学人文科学研究所教授であった坂田吉雄氏が寄贈したものである。以下、史料の形式・性格と内容を記し、「絵噺」から見えてくる幕末・維新期を記したい。

なお、解説中の001などの番号は、「絵噺」の項目ごとに付した翻刻および写真の番号に対応している(1)。翻刻作業は、主に桑原が000～032、齊藤が033～064、西脇065～096、林が097～127を担当し、最後に齊藤と桑原で全体をとりまとめた。また解説は、共同の調査・討論を経て、齊藤が文責者として執筆した。

1　「絵噺」から何が見えるのか

(1) 形式と「姉妹資料」の存在

「絵噺」は、一冊目は文久二年（一八六二）から明治元年（一八六八）、二冊目は明治二年を対象の中心とし、中央政治の動向と人々の生活に関した出来事を、風刺を交えて絵・文（・歌）で記したものである。大阪の地名や内容が多く、大阪を主体に京都・神戸地域の視点から描かれている(2)。

*1 さいとう　もみじ　国際日本文化研究センター
*2 くわはら　ゆうこ　佛教大学大学院
*3 りん　けつ　京都大学人文科学研究所
*4 にしわき　みお　京都大学大学院教育学研究科

この「絵噺」の性格を検討するためにも、先に類似資料「幕末維新絵物語」全六冊（以後、「絵物語」と略す）を紹介しておきたい(3)。「絵物語」は、大阪府立中之島図書館所蔵で、文政末から明治元年についての記述と「幕末人物伝」からなる。「絵噺」と「絵物語」は、写真053と図1からわかる通り、絵と文の構造が酷似しており、その他にも、赤や青の色彩、馬の胴や刀の柄が長いといった絵の特徴も同様である。

さらに「絵噺」には、冒頭に文化年間から慶応三年（一八六七）の状況がまとめられている。一方、「絵物語」には序文はなく、代わりに三冊目の途中に嘉永六年（一八五三）から慶応年間についてのまとめがあり、それはまさに「絵噺」の内容と合致する。その他、「絵噺」018の末尾の歌と「絵物語」図2に同様の歌が記されるなど共通点が多い。対象の年代も、「絵噺」と「絵物語」を合わせると、ちょうど文化年間から明治二年までのつながった物語となる。

両資料ともに書誌情報がなく作成者は不明であるが、「琵庵図書」の印（001・図3）が押されており、ある時期は所蔵者が同一であったことがわかる(4)。「絵噺」には明らかな乱丁があり（020・058等参照）(5)、「絵噺」と「絵物語」はもともと一連の資料が組み替えられ、分離した可能性も考えられる。ただ相互に項目の重複が見られるため別の資料であった可能性もありうる。いずれにせよ、文化年間から明治二年までの流れを念頭に記した、一連の「姉妹資料」といえる。なお、作成時期については、逐次的に作成された可能性もあるが、最終的には「絵物語」の「幕末人物伝」に記述がみられる明治三年頃に成立したと考えられる。

(2) 風説・情報と「絵噺」

「絵噺」は、瓦版や風刺画、風説を書き留めた一点物の史料群とは異なり、一連のストーリーがあることが特徴の一つである。ストーリー全体の詳細は後述するが、明らかな虚説が交る真偽混合の物語であり、忠臣蔵や太平記、太閤記に見立てた維新物語とも異なる。史実を伝えることではなく、作成者の幕末・維新観を示すところに焦点があったのであろう。

もっとも、他資料で各項目の元となる風説を確認できる場合も多く、物語性という点を除けば、風説の一形式ともとれる。幕末の風説・情報については、近年研究が進められ、幕府による情報制限がある中でも、地域の豪農・豪商が政治や人々の生活に強い関心を抱き、知識人ネットワークをはじめとして、膨大な情報収集を実現させていたことが明らかにされている(6)。情報の共有範囲は地域によって異なるが(7)、このような情報のあり方は、近代社会を支える媒体の一つとして、新聞の定着につながるものともみなされている(8)。

風説や情報についての研究に加え、蔵書や読書会といった書物に焦点を当てた研究からも、書物共有をめぐるネットワークや輪

読といった読書の形態など、近世に築かれた地盤が、明治維新ひいては近代を考えるうえで重要であることが明らかにされてきている(9)。

もっとも、これらの研究ではいずれも作成者や所蔵者の具体的な人脈や立場を考慮することが重要であると指摘されている。しかし、「絵噺」（・「絵物語」）は、書き手のみならず、蔵書印からも所蔵者を定かにできず、読者層も絞れないため(10)、検討できることは限られる。

ただ、それほど広く情報の共有が社会の底辺に根付いていたことを前提とすれば、「絵噺」は、大阪を中心とした京阪神地域において、近世から近代への胎動の一側面を、一定の共感を得られる形で提示したものということはできよう。

ところで、「絵噺」の寄贈者坂田吉雄氏は、京都大学人文科学研究所に赴任する前、大阪府立図書館の司書であった(11)。ただし「絵物語」は二〇〇二年に中之島図書館が購入した資料で、坂田氏が「絵噺」を入手・寄贈した経緯との関係は残念ながら読み取ることはできない。

坂田氏は、近世後期から近代を研究の対象とし、とりわけ第二次世界大戦後は、『明治維新史』や『天皇親政』など明治維新を研究の主眼とした。同じく一九五〇年代の明治維新史研究では、遠山茂樹氏や井上清氏が、明治維新を経て成立した国家権力を専制的天皇制「絶対主義」とし、その変革「主体」を「豪農・豪商層」や「村落支配者層」と結びついた下級武士層であるとの論理で注目を集めた(12)。それに対し、坂田氏は、一連の研究で、明治政府は絶対主義政権ではないとし、変革主体としての下級層にも否定的で、王政復古と明治維新遂行の主導的勢力は必ずしも一致しないとする(13)。しかし、遠山氏らに代わる明快な論理を打ち出したとは言い難く、維新史研究において影が薄い。

図1　「幕末維新絵物語」4冊目

図2　「幕末維新絵物語」5冊目

図3　「幕末維新絵物語」1冊目

坂田氏は「絵噺」寄贈前後の時期、明治三〇年代以降を対象とした研究や日本・中国近代化の比較研究の共同研究会を主宰し、メンバーには石附実氏、海原徹氏など、教育関係の研究者も多く加わっている。「近代化」の大枠の政治構造とともに、坂田氏が戦前に行っていた近世後期の町人を対象とした研究以来の、そこに生きる人々の意識に注目を払い続けていたのであろう。その視線は、大阪への関心と相まって「絵噺」を通してもあらわれているともいえる。

このように考えたとき、幕末に中央政治の中心地となった京都とほど近い大阪から、「絵噺」を通して何を読み取ることができるのか、以下に、その内容を追いながら検討していきたい。

2　内容――列強と対峙する「日本」意識と人々の生活への眼差し――

(1) 政治情勢を通して

①　長州びいき――「勅」を奉じた「公」の存在――

政治情勢に関して、「絵噺」の傾向の一つは、明治元年（一八六八）頃までの強烈な長州びいきである。たとえば、元治元年（一八六四）、禁門の変で長州藩は朝敵となるが、その経緯を「絵噺」は次のように記す。

文久二年（一八六二）、皇后（九条夙子：筆者記）は自身の娘を次期天皇とするため、皇太子（後の明治天皇、母は中山忠能の娘慶子：筆者記）を呪詛した。孝明天皇はそれを快く思わず、中山を通して長州藩に皇太子の庇護を求め、一方、皇后は会津藩など諸藩に皇太子の生け捕りを命じた。長州藩はこれを察し、皇太子を長州へ連れ帰った。これが以後の「乱」の始まりである（003・004等）。

さらに、慶応二年（一八六六）には、公家の花山院（摂家に次ぐ家格の清華家：筆者記）が勅使となって長州へ赴き、孝明天皇の意向として、皇太子を長州藩が守護して京都へ上るよう奮発を促し、長州で自害したと続く。その結果が、第二次長州征討において長州藩が幕府軍を撤退させ、王政復古にまでつながったとするのである（054・057）。いずれも明らかに虚説であり、史実を超えた長州びいきが読み取れる。

この長州びいきの論理を支えているのは、「勅」と外国の存在である。文久二年に「異国せいばつ」の勅命を奉じたのが長州藩であり（002）、それに対して、一橋（徳川）慶喜や会津藩は外国と結びつき、その貿易で利益を上げようとしたことが（056等）、戊辰戦争に至るまでの対立軸として描かれる。

「絵噺」の根底には、アヘン戦争後、欧米列強の進出によって中国が苦境に陥っているとの認識から、同様に日本が列強にとられることへの強い危惧と警戒がある（101・104等）。社会における海外情勢の共通認識と、列強の脅威を防ぐため、幕府にかわる、天皇を擁した「公」に認められた勢力への期待が、長州びいきを生み出したといえよう。

また京都・大阪の情報をもとにしていることもあり、公家の動向にも目が向けられているが、その中でも中山家が頻出する。中山忠能が明治天皇の外祖父にあたることから顧みて、光格天皇時代のいわゆる「尊号一件」からの流れ、長州藩とつながりの強かった忠能子息の中山忠光の動向も加わって（066）、幕府に対峙する「勅」の代名詞となっていることがわかる(14)。

ところで、これまでの研究で明らかにされてきたように、京都・大阪から中国地方にかけて、民衆の間では、禁門の変後も長州藩を支持する行動が起こった。通商条約以後、急激な物価高騰など生活を破壊されていた人々が、外国に対抗する方針を掲げた長州藩をひいきしたとされる(15)。「絵噺」にも描かれた「長州おはぎ」がその典型であり（018）、「絵噺」の長州びいきは、当時の京阪地域の傾向を誇張したものでもある。

「絵噺」は、このような世間の長州支持を、長州藩自体の能動的な働きかけの成果であるともみなす。例えば、慶応四年（一八六八）閏四月、甲州・信州で新政府と幕府側の戦が起こっている中、長州藩は大阪の人に戦のことを忘れさせ、英気を持たせるために砂持ちを始めたとして、「軍略」に抜け目がないと評する（039）。長州藩側の働きかけで砂持ちが始まったのかどうかは別として、同時期、長州藩世子毛利元徳が京都へ上った際、次第に「人気」は落ち着き、米価も下値になって土地の人たちの気請けが良いとの情報は、長州藩内に残された他の史料でも確認できる(16)。

長州藩が自藩への支持の創出を企図していたことは、慶応元年（一八六五）、長州藩の主導者となった木戸孝允が、将軍が京都へ上るのを前に下関で米を買い上げ、京阪地域の米価高騰後に放出して人気を得ることを企図した(17)ことや、よく知られている「防長臣民合議書」からも裏付けられる。山口県文書館所蔵の膨大な風説史料は、三都や長崎など情報の集積地を中心に、人々の長州藩への賛否両論を記録しており、この情報を自藩の勢力に生かしていたことがよくわかる。

それに対して、「絵噺」の長州藩支持はあまりにも短絡である。しかし、それが長州藩によって創出された部分があることを見抜いていた点は、天皇の争奪が幕末の要となっていたことを描いたこととあわせて、単に時流に乗っただけの物語ではないことを感じさせようか。

②諸藩・諸勢力への視線

長州藩以外の描かれ方を下記にいくつか取り上げてみたい。

まずは長州藩の対立勢力として最も多く登場する一橋（徳川）慶喜と会津藩について、「絵噺」は、一貫して会津藩が慶喜を操縦していたと描く（044・069等）。慶喜が、京都で朝廷や有力諸侯相手に政治的手腕を振るった姿は描かれず、逆に会津藩の剝き出しの権力欲を記す。

これは長州藩と会津藩の対立を鮮明にするための脚色もあるだ

ろう。ただ、慶喜や会津藩が、文久二年（一八六二）以降、主に京都、時には大阪で中央政治に関与していたことを考えると、間近でそれらの動向を見聞していたであろう京都・大阪地域の人々の目は真相の一端を捉えているとも考えられる。現在でこそ会津藩は、司馬遼太郎に代表されるように(18)、非政治的で「勅」に純粋であった藩主松平容保のもと、幕末の政治の風波に翻弄され、最後は慶喜に裏切られた、悲運の対象として描かれることが多い。しかし、これは山川浩『京都守護職始末』（一九一一年初版）等以降、大正デモクラシーの風潮の中で、明治維新五〇年を契機に進んだ幕府側の復権運動(19)の流れで強調されてきた結果でもある。「絵噺」は、これが当時の認識とは齟齬がある可能性を示唆するものであり興味深い。

もう一つは水戸藩である。「絵噺」は、幕末の動乱の発端は、水戸藩の徳川斉昭が外国との交易で利益を上げるため、アメリカを日本へ呼び寄せ、さらに将軍交代を目論んで一三代将軍を毒殺したことにあると記す（001）。斉昭は当時、真意はともかく攘夷を掲げていて、ペリー来航を水戸の陰謀とするのは明らかに無理があろう。ただし、他の風説においても、後に一橋慶喜が、攘夷を掲げた長州藩や天狗党を征伐したこととあいまって、斉昭がペリー来航後に将軍へ条約締結を進めた張本人とされることもあり(20)、斉昭・水戸藩と外国のつながりには同様の傾向がみられる。

水戸藩は、斉昭死後の藩内闘争により中央政治から遠ざかったとはいえ、先に見たように、攘夷を掲げた長州藩が、京都・大阪を中心に人気を博したのとは対照的である。当初、攘夷を掲げていたはずの水戸藩がそれほど支持を得られなかった一因を、「絵噺」は暗喩しているようでもある。もっとも純粋な長州藩に対し、謀略の水戸という構図を描きながら、長州藩の「軍略」の妙を指摘している点が、「絵噺」らしさともいえる。

その他、禁門の変に至るまで長州藩と対立していた薩摩藩についての記述は、王政復古時に至ってもどこか冷ややかであるが、尾張藩や備前藩、幕府方では姫路藩や老中板倉勝静、「誠の武士」を見せた東与力や朝廷を思う会津藩士にいたるまで、諸藩や幕府側の動向を拾っている。慶応四年（一八六八）、板倉が獄門にあったとの記述（071）は真実ではないものの、当時、板倉父子が宇都宮の戦いで死去した報が流れており(21)、種々の風説をもとに記されたことがわかる。

ただ、このように諸方面の動静を示す中で、越前藩に関してはほとんど触れられず、一時期政治総裁職にまでなり、「四賢侯」の一人とされる松平慶永の名は、「絵物語」の「幕末人物伝」にも見られない。京阪地域での越前評と関係しているのであろうか。

(2)「異国人」「切支丹」が生んだ「不思議」話

ここまでに記したような列強への警戒には、日常の生活における恐怖と反感も合わさった外国観も加わっている。その一つは、

外国が呼び起こした政治情勢の変化の下での物価高騰、治安悪化であり、「絵噺」でも、よく知られている幕末以来の用金取り立て、人々の困窮、米屋への騒動が繰り返し記される（052・059等）。

もう一つが、とりわけ明治以後に見られるキリスト教の介入と、それを排斥しようとして抵抗する仏教をはじめとした日本の宗教的存在である。キリシタンによる偽の病気治癒者の取り締まりや、日本の神仏がキリシタンを捕縛・退却させたこと（112・120等）、時には人知を超えた自然現象など（024）「不思議」話が展開される。

これは慶応三年一二月七日（一八六八年一月一日）に大阪が開市となり、大阪の川口に居留地が造成されたことも大きく影響していると考えられる。これにより、京阪地域の人々と外国人との接触が増え、外国人との条約や契約問題、時には暴力行為など、しばしばトラブルが発生していた(22)。また幕末期、政治情勢に左右されて生活が混乱する中で、天狗や神、宗教などの人知を超えたものを媒介として世直しを求め、最終的には幕府にかわって新政府を受け入れた大阪町人がいたことも指摘されている(23)。

その中で、キリスト教への警戒と仏教を尊ぶ「不思議」話の出所として、東本願寺での法話があげられる(24)。「絵噺」においても東本願寺の門徒に手を焼く諸侯の記述がある（075）。また明治三年（一八七〇）に開拓長官として函館にいた東久世通禧（みちとみ）は、東本願寺の僧侶が函館に到着後、民衆の信仰は蟻のごとく集まり、政府の事業である北海道の新道築造にも協力を得られるだろうとして、「親鸞の威光可驚事に御座候」（親鸞の威光は驚くべきものだ）と自嘲気味に記した(25)。東本願寺の影響の強さがうかがえるが、東本願寺に限らず、蒙古襲来を予測したといわれることから「絵噺」に頻出する日蓮宗など、様々な宗教を介する集会の場が人々の風説の拠点の一つとなっていたのであろう。大阪の海老江村のホトトギスの話（103）が、実際に同地区の南桂寺に残されているように(26)、「絵噺」は完全な創作ではなく、地域で共有された情報に典拠があるところが面白さの一つともいえる。

（3）新政への落胆―京都、大阪地域の特性と普遍性―

「絵噺」は、外国との対峙を軸にした長州藩びいきと人々の生活・「不思議」話を包括する形で、明治二年（一八六九）戊辰戦争終了後、新政への失望に帰着する。この落差の大きさが最大の山場でもある。

例えば、列強が日本を狙っている中、戊辰戦争は「同士討」であり、戦後の敗者の石高削減が再度の国内対立の元となり、「浅ましき」ことと記し、「皇政治」への批判を正面から繰り広げる（117）。そこからは「勅」を奉じた長州藩への期待は消え失せている。そして、米価高騰に加え、政府による商人への用金取立てなども相まって、「早ふ死にたい」とまで記す（095）。「絵噺」には国学に積極的に関与する要素は見当たらないものの、まさに「夜明け前」の世界が展開されているのである。

もっとも、同じ大阪において、慶応元年（一八六五）時点ですでに幕府と長州藩の「同士打」を批判していた町人がいたこと(27)に比べると、「絵噺」における「同士討」論はいかにも遅い。

ただ「絵噺」の落胆の裏には、大阪をめぐる慶応四年（一八六八）以降の状況の変化がある。「絵噺」は、慶応四年の大阪親征によって、大阪は「都御所」のようで、古代から聞いたことがないほどの珍事であったとする（063）。一方、翌明治二年（一八六九）、天皇・皇后が京都から東京へ移ると、大阪も火が消えたように衰微、困窮していく様をまざまざと描く（092・093等）。京都においては、皇后の東京への行啓に対する町人の動向から、自分達の生活が天皇・朝廷の存在により支えられているという共通認識が読み取れるとされ(28)、大阪でも同様と捉えられる。

また京阪に代わって栄え始めた東京において明治新政府のトップとなった三条実美や、大阪府の役人間で賄賂が横行していたとされることを背景とした(29)大阪府関係者へも批判の視線が注がれる（109）。藩士クラスの新政府要職者はほとんど描かれないのが特徴ではあるが、参与兼外国官副知事・会計官出仕として明治二年初めに大阪にいた「大熊」（大隈重信）が、米買占め商や石建米商廃止の関係から批判されている（100）。

わざわざ「皇政治」と記したように、新政府が擁した天皇に対しても容赦がない。このような天皇批判は、例えば京都の公家に残された史料でも、「天子　其本乱而末治者否」（大本の修身が乱れていながら、その末の国・天下を治めることが達成されるということはない『大学』）と評されているように(30)、京阪地域で一定度は共有されていたと考えられる(31)。このような地域性や生活の困窮を背景に、「日本」を乗っ取ろうとする列強への一貫した警戒と、その対策を実行できない新政批判が根底に存在したといえる。

このように考えると、「天罰」「神罰」を繰り返し記す「絵噺」における「皇政治」批判は、「天」から国家全体を見渡して、海外情勢の中での「日本」の今後を憂慮する視点が、幕末から明治初年の社会に根付いていたことを示しているようにも見える。よく知られているように、木戸孝允は、慶応元年（一八六五）に、長州人でも、日本人でもなく、「天」から「皇国」を見て、今後の国家構想を記した。この時、藩を国家立て直しの「道具」と言い切った木戸と(32)、「藩」闘争を軸にする「絵噺」とは大きく異なる。ただ、外国という対峙対象が出てきたことで、日本国内に、「天」から世界全体を見渡そうという意識が浸透していたことが「絵噺」からうかがえるのである。江戸を中心に幕末の錦絵に描かれた鳥瞰図が、社会全体の急激な秩序変動をまさに高見から俯瞰して表現しようとしたとの指摘があるように(33)、幕末の政治情勢の全体像、ひいては「日本」を上から見渡そうとする意識は、近世末期来、潜在していたことを「絵噺」も感じさせるのである。

むすびにかえて

以上のように、「絵噺」は風説をもとに、あえて真偽を織り交ぜた創作の中に、メッセージを込めた物語である。まさに「巷談」とした所以でもあろう。

ところで、「絵噺」は、これほどまでに列強の国内からの排斥を求めながらも、文久三年（一八六三）に長州藩が実行した外国船への砲撃事件を真正面から取り上げない。攘夷実行後、公家の正親町公董（左近衛権少将・国事寄人）が勅使として長州へ下ったことはもちろん、長州藩の攘夷行動を称賛する趣旨を明確には示さないのである。これは、明治後の開国方針の決定と、実際の攘夷が無謀であることを認識していたためであろうか。脚色に彩られた内容に引き換え、冷めた理性的な視点がうかがえ、それが意図的な諷刺創作を一層際立たせている。

それゆえに、なぜ新政に落胆した明治二年（一八六九）以降に、新政の中心を担う長州びいきの幕末物語をまとめたのかは疑問が残る。明治二年に入ると、絵は簡素で彩色もなく、文は未完や存在しないものが増え、政治的要素よりも「不思議」話が多くを占める。同時期には、幕府時代は制限されていた情報が、政府の「太政官日誌」や新聞によって「公」になり、個々が収集する風説の時代は終焉を迎えたとされる(34)。風説をもとに成り立っていた「絵噺」もその例外ではなかったのであろう。また、天皇・皇后が東京へ移り、京阪地域の活気が低下する時期でもある。さらに幕府（会津藩）対長州藩といった二項対立が消え、「絵噺」の中心であった「戦」という派手な舞台がなくなったことも関係していよう。

あえて長州藩への期待と落胆を通して、新政への批判を強調したかったわけではないであろうが、ヒーローになれなかった長州、新政批判の中にも再執政を求められない徳川・幕府方、そして次なる「世直し」を求めない姿は、「絵噺」の形式的な変化とともに、落差の大きさをうかがわせる。このような中で、外国からの政府への難題を岩倉具視がはねのけた様や（098）、仏教がキリスト教を圧倒する様を繰り返し記すのは、落胆のはけ口といえようか。

明治初年、大阪の中心部は、外国からの機械・建築技術を導入した造幣寮や、鉄橋高麗橋の建設など、日本における「近代化」の最先端であった。しかし、「絵噺」からは、造幣寮の記述はあるものの、錦絵に見られるようなきらびやかな近代大阪の姿はうかがえない。

このことは、「絵物語」も含めて捉えると、政治記述が増える安政五年（一八五八）から約一〇年、中央政治変動の中心地の一角に渦巻いた熱気は、たった数年ですっと引いていったことを暗示しているようにも見える。その膨大なエネルギーがどこへ向かったのかは慎重な検討を要し、「絵噺」の言葉を借りれば東京

へ「飛んで」行ったわけではないであろうが、直線的に「文明開化」へと向かわなかったことは事実であろう。それでも、聖徳太子以来の長きにわたる由緒を誇る大阪町人を擁した町（118）は、「絵噺」を通して、外国との対立軸の中で、日本という国家全体を「天」から見ようとする目と、一方で地に足をつけた人々の生活に向ける眼差し、この両方が揃ってこそ、明治維新が成り立ったことを示唆している。近世から近代への情報の在り方の変わり目の中で、「絵噺」を通しての京阪地域の一光景は、当時の情勢の一端を映しているのである。

註

（1）原資料は彩色されている。解説中の年代表記については、明治五年（一八七二）までは和暦（西暦）とし、それ以後は西暦とした。

（2）大阪が主体であることは、後述の「絵物語」において、徳川慶喜の将軍就任後に起こった京都での「太平おどり」に対して、大阪から見ると合点が行かないと記されていることからも裏付けられる。

（3）四冊目のみ「明治維新絵物語」と題す。六冊目は表紙に「明治三年戊辰」とあるが、内容は戊辰戦争が中心で、明治元年を記している。なお、一冊目については、『大阪府立図書館紀要』第四八号（二〇二〇年）に翻刻がなされている。

（4）「絵物語」には他に「琴月盦主珍賞」の印も押されている。

（5）「絵噺」、「絵物語」ともに、資料の大きさは均一ではなく、「絵物語」は上部の文字が切れている部分があることから、製本への過程で乱れたことも考えられる。

（6）岩下哲典・真栄平房昭編『近世日本の海外情報』（岩田書院、一九九七年）、宮地正人『幕末維新期の社会的政治史研究』（岩波書店、一九九九年）、岩田みゆき『幕末の情報と社会変革』（吉川弘文館、二〇〇一年）等。また京阪地域における町人等の日記の翻刻も進み、当時の風説を読み取ることができる（内田九州男・島野三千穂編『幕末維新京都町人日記』〔清文堂出版、一九八九年〕、脇田修・中川すがね編『幕末維新大阪町人記録』〔清文堂出版、一九九四年〕等）。

（7）高部淑子「「人のうわさ」考」（保谷徹編『幕末維新と情報』〔吉川弘文館、二〇〇一年〕）。

（8）前掲、宮地『幕末維新期の社会的政治史研究』一三六～一三九頁。

（9）岡村敬二『江戸の蔵書家たち』（講談社メチエ、一九九六年）、前田勉『江戸の読書会』（平凡社、二〇一二年）、横田冬彦編『出版と流通』（平凡社、二〇一六年）等。

（10）なお、国文学研究資料館蔵書印データベースおよび早稲田大学古典籍総合データベースにて、「絵噺」・「絵物語」と同様の蔵書印が見られる。

（11）坂田氏の略歴に関しては、「坂田吉雄教授略歴・著作目録」（『人文学報』第三〇号、一九七〇年）、『人文科学研究所50年』（京都大学人文科学研究所、一九七九年）による。また、後述の坂田氏主宰の共同研究会については、各年の『人文学報』によった。

（12）青山忠正『明治維新と国家形成』（吉川弘文館、二〇〇〇年）二〇頁。

（13）坂田吉雄「日本に於ける近代官僚の発生」（『人文学報』第三号、一九五三年）等。

（14）先に勅使として触れた花山院は、慶応二年に死去した家厚を意識したものと考えられる。その父は中山家の出身で、「尊号一件」

に関与した中山愛親の養兄弟である。

（15） 三宅紹宣「西国民衆の長州贔屓」（『別冊歴史読本』一五号、二〇〇五年、一二六～一二七頁）、山口県編『山口県史』史料編幕末維新四（山口県、二〇一〇年）六一二～六一三頁。風刺画においては、京都大阪の長州びいきに対して、江戸では徳川びいきであったと、地域差が指摘されている（南和男『幕末維新の風刺画』〔吉川弘文館、一九九九年〕五～七頁）。

（16） 「覚〔風説〕」（「宮崎家資料」山口市歴史民俗資料館蔵）。

（17） 齊藤紅葉『木戸孝允と幕末・維新』（京都大学学術出版会、二〇一八年）一〇八～一〇九頁。

（18） 司馬遼太郎『街道をゆく』三三（朝日新聞社、一九九四年）一七二～二〇六頁等。

（19） 奈良岡聰智「「昭和戊辰」における明治維新イメージ」（瀧井一博編『「明治」という遺産』〔ミネルヴァ書房、二〇二〇年〕三八〇～三八二頁）。

（20） 「〔雑書〕」（山口県文書館蔵）。

（21） 「大日本維新史料稿本」（東京大学史料編纂所蔵デジタル）慶応四年五月一八日等。

（22） 新修大阪市史編纂委員会編『新修大阪市史』第五巻（大阪市、一九九一年）八〇～八五頁。

（23） 中川すがね「民衆と変革」（『歴史科学』一二八号、一九九二年）。

（24） 前掲、『幕末維新大阪町人記録』二五七頁。

（25） 岩倉具視宛東久世通禧書状、明治三年七月一五日（佐々木克・藤井譲治・三澤純・谷川穣編『岩倉具視関係史料』上〔思文閣出版、二〇一二年〕七二頁）。

（26） 鷺洲町史編纂委員会編『鷺洲町史』（耕文社、一九九三年）一七四二～一七四三頁、奥林亨『南桂寺と海老江』（南桂寺、一九九七年）七五～七六頁等。内容の詳細は各々異なる。

（27） 前掲、中川「民衆と変革」。

（28） 吉岡拓「明治初年における民衆と朝廷」（『史学』第七三巻一号、二〇〇四年）。

（29） 前掲、『新修大阪市史』第五巻、三四～三九頁。

（30） 「鴨脚家文書・甲〔幕末維新風聞雑事〕」（京都府立京都学・歴彩館蔵）。

（31） 江戸を中心とする諷刺画については、次のことが指摘されている。幕末、政治権力抗争の一翼を担った天皇・朝廷を全体的な政治情勢の中に位置づけて諷刺を重ねてきたこと、戊辰戦争期には幕府にかわって天皇を権威として担いで江戸に入ってきた新たな権力者への恐怖を背景に、天皇諷刺が展開されていたことである（奈倉哲三『諷刺眼維新変革』〔校倉書房、二〇〇四年〕四一九～四五七頁）。京阪地域の天皇批判とは異なる点を含んでおり、地域性や作成者を慎重に検討する必要があるが、作成者不明の「絵噺」ではこれ以上は検討しえない。

（32） 大島友之允宛木戸孝允書状、慶応元年七月一八日（『木戸孝允文書』第二〔日本史籍協会、一九三〇年〕八九～九三頁）。

（33） 杉本史子「鳥瞰風景のなかの将軍」（箱石大編『戊辰戦争の史料学』〔勉誠出版、二〇一三年〕）。

（34） 前掲、宮地『幕末維新期の社会的政治史研究』一三七～一三九頁。

本稿執筆に際し、史料の所在・翻刻編集等につき、岡村敬二氏、安国陽子氏、大阪府立中之島図書館から貴重な御教授を賜りました。ここに謝意を表します。

翻　刻

〔凡例〕

一、本稿は、京都大学人文科学研究所図書室所蔵「幕末明治巷談絵噺」全二冊を翻刻したものである。

一、用字は原則として常用漢字を使用したが、異体字・俗字などは原文書の通りとしたものがある。

一、変体仮名は「江（え）」、「而（て）」を除いて、平仮名に直した。

一、適宜、読点を付した。二行割は〈　〉で示した。闕字は一字空きとし、改行は文意を損ねない限り省略した。

一、破損、虫損による判読不能の箇所は、□や「　」で示した。

一、誤字・脱字等で意味が通りにくい場合は〔ママ〕、文字が不確かな場合は〔カ〕を付した。頻出する「朝庭」の「庭」（廷）、「仏蘭亜」等の「亜」（西）、偏が異なる「性」（姓）、「操」（繰）、「読」（続）、「輪」（綸）などはそのままとした。ふりがなは漢字の読みや送りがなと合致しない箇所もあるが、すべてそのままとした。

一、項目が変わるごとに、冒頭に三桁の番号を付した。

一、項目の題字は太字で示した。題字や絵に付して記された文字や絵の中にある文字については、〔　〕でその位置を示し、その後に記した。

〔一冊目表紙〕「幕末明治巷談絵噺」

001

文化年中には下元之上分也、〈□□の世とは〉〔上元カ〕違ひて世界の人よくなれて「　」賊少し非人少し、戸ざゝぬ御代ハ是なり、米は六十目になれる、年〳〵豊年ゆへ也、朝庭ハ仁光天皇様とて大徳の帝なれバうれい事一切なし、長命にして即位長し、文化文政天保と都に御座被成ける、文政と改暦ありてより下元中分の下こしらへて世のすへとなり、寅とし伊勢御影参リ阿波国ゟはじまる也、日本賑わし、大地震アリ、大西芝居焼人死多し、其内人殺し有世荒くなる、諸国なげきけれともセんかたなし、文政も十四年立天保とかわる、東奉行矢部駿河守との海中へ山築く、是天保山也、森の宮猫間川堀リ割堀川樋の口へぬく、十丁目すじ大道へ橋かゝる、是夫婦橋也、名高き夫婦池埋ミ妙見堂建ツ、大変なる事沢山ありて筆につくしがたし、天保弐年切支丹吟味はじまる、猿がり坊主がり、これハ上人たりとも身持あしきヲ吟味なりとかけがり皆是東与力大塩平八郎とのはげしきゆへ也、〈其ころ町中に〉恐れぬものなし、天保六ノ冬大塩隠居いたし養子格之助継也、東奉行かわり跡部山城守との勢イつよく米百廿目トなる、大坂こんきうする、奉行ハこれかまわず江戸へ廻米す、大塩これを見かね隠居ながら市中あわれミ奉行へ願ひ書上る、何とぞ江戸まわりノ

米少々ゆるし民の難渋たすけ下されと云、奉行何いんきよノ分在で入らざるかまひ立、左思ふならバ還俗して勤むべしといふ、大塩りつぷくし髪のばし出るこしらへす、是天保八酉二月十九日の乱これ始メ也、大塩ハ万民をおもひ奉行ほろぼさんとすれども、公義ノ威光諸大名引うけての軍なれバ町焼立出陣すれども叶わず、あわ座ミよしや五郎兵衛宅にて亡ふ也、それより米高となりて死人□□数しれず、光陰矢のことしと天保すへにいたりて、水戸侯むほんありて亜墨利伽へ通じて房州浦賀へよび寄、しらぬ顔して大名にたのみ上総房刄へ陣どりさセ、其間に江戸□　□十三代将軍に毒がいす、相読ハ一ツはしにさセんと工む、箱舘にて交易セんたくみ也、諸大名□　□これを考、ミな〳〵陣はらひ勝手に国へ引とりける、是ゟ水戸露顕セしとうそ気味□　□領分ノ寺々つりがねたくり大筒に吹キ、一国かためける、日本乱引出セしハ水戸隠居がはじ□　□井伊どのハ実にて幅将軍に遠慮□　□〈外国ト水戸〉取引ハしらぬ也、井伊との□　□是弘□　□将軍ヲ毒がいと一ツはし相続□□、箱舘交易□　□の□　□ハ井伊□　□一ツはし将軍にする事諸大名ふとくしん也、相ぞく伊よ最上へ乱落ち、水戸ハ顔つぶれ□ゆへ井伊をにらみいる也、諸大名井伊に従ふ、それより将軍家茂公十四才之時、井伊との大老ノ官たり、是より水戸尾張越前に蟄居申付らるゝ、此使者ハ会津肥後也、此時分ゟにくまれもの也、加奈川交易ハ水戸ゟよびよセしゆへよん所なくはじめる、これ水戸のわざ也、これ好まざる交易なり、是井伊との一人の腹らにも叶わず、今外国おいちらすハ安けれども日本和合ならざる時ゆへはからす加奈川開らきける、弘化嘉永過て安政と改元あつて寅どし、ヲロシヤ国天保山へ来る、諸大名陣とりかへりしあと大地震、津波、同三年疫病はやる、これ一ころといふ、箒星出る、一ツも笑ふ事なし、ます〳〵米高、此時水戸ゟ井伊との老中をねらふ事、登城たひ〳〵鉄ぽう打也、追イ〳〵年かわり七年目に万延と元年申三月三日、大老井との式日登城掛ケ桜田門前にて水戸浪士と唱ヱ乱妨アリテ首うしなふ、是手はじめとして京都にて首切事、寫田左兵衛はじめとして其数かそへがたし、薩土長、都入ヨリ文久トかわる、其後会津京着より大乱引出し薩土長ト不和となる、其後三年目に元治子とかわる、中山二男侍従との大和乱おこる、是四月也、其七月には会長不和によつて京都乱焼打はじまる、中川之宮はびこる、慶応元丑ノ四月ヨリ将軍家茂公長刄征伐セんと東都進発、大坂へ入城、廿五大名長刄へセいばつ下リアル、寅五月ヨリ軍はじまり関軍一度も勝利なし、其内五月入梅中、大坂米屋乱妨アル、七月城内にて将軍御他界、一ツ橋将軍と成ル、外国人来り浪花城中馬乗相にす、簇元一ツ橋と不和之色あらわし東都江引とる、老中板倉諸司代桑名若狭会津、京都にてむほん、皇帝ヲ盗ミ出さんとす、薩土これを考、京着してこれをさゝゆる、帝ヨリ朝敵といふ長刄ヲよひのぼし給ふヨリ追イ〳〵悪事露顕いたし都のわんだくと成ル、朝庭極月御誓去、是あやしミて新帝葬式に立給わず、気に入の会津公家もろとも尻

段々はげかゝり、中川押込、悪公家三十軒戸〆

002 帝男山御幸〈長刕へ輪言くだる〉

文久二戌、朝庭加茂御幸の後男山御幸、公家武家爰を曠と寄羅を銚り御供、此日将軍家茂公病気にて供なし、一ツはし替り也、長刕薩刕肥後肥前筑前加賀仙台会津佐竹上杤津がる南部越前若サ也、此時八わたにて帝御拝のあと八わたに納りある太刀一振り、錦のはた一流れ、勅命ノりん紙一通、三条殿これを持出給ひ、誰か有ル異国セいばつの心あらハ是をいたゞくべしといふ、大名顔見合セける時に長刕はしり出、異国セいはつの御輪言毛利大膳太夫忝いたゞくべしと納給ふ

〔絵右横〕有栖川卿下地ヲつたへ給ふ〔絵右下〕古しへ一品阿保親王七代□　□大江広元ノ末葉にし□外大名と同様にあら□、朝にもこれをよくしりたもふゆへ、かるくあしらい給ふ事なし〔絵中央下〕此年より八文銭吹出す、文久銭ともいふ

003〔無題〕

文久二、皇后太子ヲにくミ給ひ悪人申合セうしない奉らんす、是天皇よく御そんじあつて中山ヨリ伝へ長刕へあづけ給ふ、長刕ハこれをあつかり大仏にて守護する、またこれを生どらんと大名に申付る、会津若サ桑名井伊松山宮津これら其時大仏とりまきしかたゞ〳〵、長刕ヲ打とり太子をうバゝん手はづ也、長刕これを考本国へつれかへる、一夜にすぼぬけくわされはら立に朝敵と言ふらセしハ会津中川ノ作也

〔絵左上〕皇太子八才ト云〔絵右下〕三条殿四条殿新帝ヲ補佐し給ふ〔絵左下〕朝庭ヨリ皇太子ヲ預り奉り都大仏に鎮まる所、悪公家大名トかたらひ長刕ヲ亡ほさんトス、是ヲよくしり太子供して国へ引とりたもふ也

004 皇后太子をねたミ給ふ

文久二戌年、后腹姉姫十一才、太子九才弟なれとも局腹にて男子、是後帝にするをねたましく女帝にセんと欲気さし太子をうしなハんたくみ、青蓮院粟田之宮にたのみ太子をのろふ也、帝これをよくしりたまひ局ハ中山ノむすめなれバあづけ太子ハ長刕へあづけたもふ、大仏にて守護する、これを生どらんと大名たのむ、長刕これをさとり夜にまぎれ太子ノ供いたし我国へ引とる、是乱の元也

〔絵右上〕九条関白殿息女嘉陽門院〔絵右下〕姉姫梶の宮十一才〔絵中央下〕粟田もこれにのり、われ後見してあとハ天子にならん欲心也

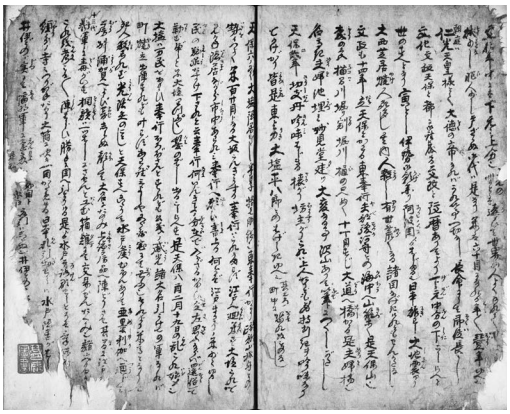
005 中山侍従卿ほうらつ

文久三亥ノとし、父中山大納言どの閉門也、是より思ひつきしばらくあほうとなりどてらに三尺帯にて懐に金子はなさず、悪たれものにちか付髪ゆい部家ものばくち仲間トまじわり折〳〵酒のまし、京都中にて中山の権太と名高くなりづぼらにてくらしたもふ、是殿中の説をきかん為也、其中中川会津だんこうして帝に南都御幸すゝめ、道にて大変をこしらへ、たすけしと見セ帝を我国へ連かへり、是ヲ楯にして日本したがへ朝ていをのまんとす、中山これを聞出し、南都御幸の道をふさぎ延引させんと名もなき軍おこす也、是帝へ忠臣ナリト云

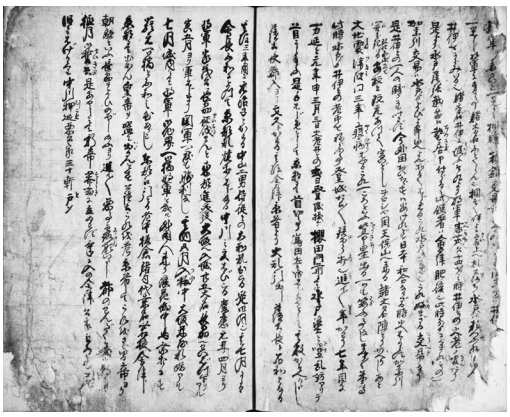
〔題字下〕長刕国へ引とり朝敵といわるゝ

006 中山〈三男侍従〉天の川辻〈陣とり〉

同亥のとし二月ヨリ長刕ト同腹いたして軍勢かりうけ大和に出、会津ノはかりことをさまたげ道をふさぐ也 「太子様ノ為には中山殿ハ祖父也、侍従卿ハおじ也、帝へ忠臣なれども此時ハわからずむほんとなり、長刕へ落るトいへとも程なくわかるべし、此時ヨリ会津のむほんあらわれ有也、何分公家にへつらい金まきちら



001



003

002

しあれば中〳〵京都にて申ともこたへず、それゆへ中山二男三男出て大和にて道をふさぐ也

〔絵右上〕中川会津のむほん見つけてかくさまたげ名もなき軍おこす也〔絵右下〕南都五条焼キたつる

007 高橋つぼね悪に組す

文久二、長刕太子御ともいたし我国へ引とるより京都より朝敵と言ゝ立けるゆへ、是をほどかんとたび〳〵書ヲ奉るといへども此つぼねゆへ帝へ一通もとゞかず、是会津よりまいないにてとゞまる、長刕ハこれゆへ長らく苦痛也、京都ハ悪人ばかりにて善人ハミな〳〵閉門なり、是ゆへ長刕八家の内、増田右門尉一万千石福原越後一万石、此二人来り直々ねがわんとする、是入ては事あらわれん事をいやがりこれをさゝゆる、よつて両人おして入らんトする、入まじとして京都焼打の乱これよりおこる也

〔絵右上〕帝御座ちかく寄る局也、まいないとり給ふ〔絵右下〕是等皆世界洗ひ替る道具なるべし〔絵中央下〕中川会津悪公家、長刕土刕ヨリさしあげる書ハ帝へとゞかぬやうに此つぼねにたのみおさへさす也

008 京都大乱ぼう

元治元年子七月十九日朝辰のこくゟおして書ヲ奉らんとす、会津これを打とらんと大筒はなす、それゟ京中大火となり人死多し、丸焼也、是より長刕会津いこんとなり、慶応四辰正月、伏見合戦是ヨリおこるこんげん也

009 長藩枚方へ渡り高名

同七日、淀鳥羽軍破れ会桑浮あしとなる、此時長藩足軽組ノ老人林小平二ノ忰同小一郎当年十四才なれとも大兵也、同渡辺金兵衛忰金二郎十七才、騎兵隊にいまた入ず童隊にてさしたる功もなし、二人申合セ山崎放れ下ゟ枚方へさむさいとわずおよぎ渡り、落武者を待うけ両人手がらの一也、軍奉行ノ高名帳に乗りて双方とも三百石にとり上トなり、其父ともに御褒賞にあつかるト云

〔絵右上〕壱人前に敵六十人ツ、打取、大将分ノ首二ツ宛さげ山崎へかへる〔絵左上〕其死かいにこと〴〵く印付ある事、奉行これをしらぶるうへにて手がら帳にのセるトいふ〔絵右下〕両人とも童なれども釼法よくたんれんト云

010 長藩冨川小三郎伝

同正月十四日、此庄屋にうらみあるものやら長刄旅宿へはしり来り、天王寺村 某 会津之品ものあつかり居るに相違なしと訴ものありて、早速冨川小三郎かけ来り主を責るに覚なし卜云、元ゟこれは無き事也、小三郎こらへかね長釼引ぬきてあるじをおどろかす、あるし覚なければたおれ気をうしなふ、よく〳〵たゞセバあとかたもなき事なれバ是冨川どの運の尽る所也、此事家老に聞ヱ小三郎乱心に落、庄屋へ申わけト世上へはぢと殿の顔清めん為、小三郎切腹と極り中寺町にて自殺す卜云

004

005

006

007

008

009

へあだ華を手折て我も散りてゆく

〔絵右上〕長藩にて五百石、浪花中寺町に着ス也、十九才にて強勇

〔絵右下〕其ころ此しらべは薩長ゟいたされける〔絵左下〕天王寺村庄屋

011 出羽庄内薩刄をうらむ

尾刄鍋しま長刄土刄芸刄附而朝庭ノ御詞かゝり早々京着あつて是も別して強将なりといふ、会津にかゝわらず和之宮母公あるが故江戸にて町まわりいたされける所、薩刄無法をいきどおり不和

の色あらわれたり、先京都より御めしなれば参内、是則和合之しるしなり、庄内ハ会津と一ツにあらず、只東都にて母公和ノ宮日光上野ノ宮大切に東都町まわり役にて心労なる所、浪士之事ゟ⊕と不和となる、これ⊕出来あしく庄内に利ある也、後に庄内城会津にとらるゝ、大坂蔵屋しき封印付

〈薩劔と喧嘩せい出羽武士たゝず今ぞ生死の酒井左衛門

〔絵右上〕酒井左衛門尉四十五才、強将也〔絵中央〕「殿も仁有りトいへとも薩劔の法外をいきどおり合戦と決着ス所へ都ヨリ勅命ありて閏四月十五日京都へ来られける〔絵中央下〕家老牧尾大膳ノ亮、薩劔打ほろぼさんと軍略ヲめぐらしける、是智勇人也

012 毛利大膳太夫侯心底

源頼朝武将たる時、京都ヨリ頼朝江差添に付おかれ〔ママ〕人也、家来にあらず、此人死去之後毛利とかわる、其胤今にきれず、天正時代毛利勢イつよくして兵庫ヨリ西播劔一円にとり、西長防とり、豊臣秀よしと争そふ時ハ広しまが本城なり、和陸の印広しま秀よしにさし上、長門を本城として引とりける、これによつて菩提所ハ今に広しまにあり、一端秀よし公と和合なれバ別して一家なり、関ケ原合戦より徳川にとられしを残念におもいくらセし也、此慶応乱に分どりハ秀よしの物とりかへセしこゝろなり、豊臣生る気也、中々此国にかぎりむほん強欲なし、程なく黒白相わかるべし、むかしヨリ分どりの冠頭是ナリ

〈浪華津も団子で命繋けり

〔絵右上〕家系一品安保親王ヨリ七世大江太夫広元ノ末孫也〔絵中央上〕大膳大夫侯〔絵右下〕伏見合戦ハ天領年貢納めし時なれハ分どりの高しれず、これ薩劔よりねたむなり〔絵中央下〕家老宍戸ハ一品親王に付人ナリ、広元公ヨリ古し、今一万千石なれども殿と同座先列也

013 京中焼出さるゝ

其ころ諸国ヨリ会津〳〵トわる口人気あしきハ天ゟ人にいわするなれども、京都にはまいないゆへに会津〳〵ト大事にしられける、是大乱の元なり、かねもらへバ世の砕るもかまわぬ公家ばかり、善人ハミな〳〵押こめとなりたもふ、いたわしきもの也、是ゆへ都コ潰れトなれども御所にハ会津ハ忠臣第一ト放したまわず長劔ヲ憎むかたちなれバ納りつかず、是いまだ時節来らざる故善人ハ埋れ悪人に花咲也、峠あれバ麓有ルト程なく黒白わかるべしト下〳〵の目がね違ハぬ所なるべし

〔絵右上〕焼あとへかり小家建しのぐ也〔絵右横〕下万民慶応中のくるしミ会津〳〵と言ゝくらす、万民のうらミにてもほろびる相アリ

014

会津山崎ノ仏社ヲ焼

同七月廿二日、是に長刄かゞみいるかと宝寺八まん社百性家にいたる迄、軍勢さしむけ焼つくす、これによつて会津が朝敵也、長刄臣天王山にて十七人切腹する、のちに埋し所へ印建、残念さまとて参詣ある、会津よりとがめる、ミなねつ病にて死する、それゝまた〳〵参詣多し、会津評判ます〳〵わるし、此二ケ所ハ勅願所なれバ朝敵とは会津をいふなり

〔絵右上〕八まん宮焼る〔絵中央上〕宝寺やける

010　011

012　013

015

長刄山口城普請する

山口ノ城普請成就いたしける、其地利外廓塀のまハり凡十二里廿町アル、塀ヨリ天守マテ二里ナリ、塀ノ内には山にてつゝみ其山隔て大河ひかへたり、大筒小筒これに并らべ軍用兵粮の要がいよし、万代ふ易是なる名城なり、是ゆへ何万騎寄セも大丈夫といふ

へ東から軍人形の下くだし足がとれたり首がぬけたり 読人しれず

014　015

016 外国人籏元長劔にうたる、

元治子霜月、将軍家茂公東都にて外国船十万両にてたのみ、長劔を責おとしくれと此船へ籏元軍勢沢山乗セて長府福浦の湊より責、長劔まけてにげいだすかまいとおもひ、船々ミな〳〵上り責いらんとす、十分引よセ皆ごろし、船ハ三艘とられ是ふらんす也、大筒にあたり死したるものミな元服あたま也、其中に大将壱人おとし穴にはまりたすかる、是大坂西奉行に来りし川路左衛門どの也、生とられ東都へしやうこ人なれバ長劔にたすけある也トいふ

〈団子喰ヤ骨喰ふとたとへ有リ

〔絵右下〕姉小路ころセしも会津、仙洞御所へ鉄ぽう打しも会津、是ミな長劔江ぬり付朝てきトいふ也、ミな〳〵長劔にとらへある、これゆへ長劔ヲ京へ入レざるなり

017 十四代家茂将軍〈へたかる〉

慶応元うし二月、武田高雲斎追イしりぞけ、三月老中二人すゝめによりてうか〳〵これにのり長劔へ進ばつとい、立江戸中用金とりあげける、尾張にていやミいわれ、膳所で追イちらされ、京都でしかられ、大坂でわらハれ、長劔に恐れ、入用に用金たび〳〵申付あいそつかされ、慶応寅七月一ツはしの計略にかゝり切腹にて相はて、天下慶喜に奪ハる、

東都で味噌名古やでも味噌膳所てミそ都でもミそ浪花津てミそ

〔題字右横〕浪花北新地焼に生れたる人にて伊ヨ最上の子也、丙午なれバ其気質荒し〔絵右上〕進ばつは徳川つぶれる瑞相なり、残念〳〵〔絵右下〕将軍進ばつすゝめしは松前白川にあらず、一ツはし会津となれ合老中にすゝめさし、大坂へおびきいだセし也

〔絵中央中段〕「将軍ハ我レ進ばつあらバ西国大名ハまねかずとも来るとこゝろへて進はつすれども一人もきたらず〔絵中央下〕老中松前まつたくこれら悪にあらす〔絵左中段〕是にて両人しくじりとなる〔絵左下〕老中□　□会津□　□す□　□

018 京都大坂のわるくち

元治元子八月朔日店びらき、朝ヨリ七ツ時迄七十貫文売上かへる、いづくの人やらしれず、一日切りにて来らず、是会津にあてつけてのあきない、京一ぱひの評判となり此趣興面白し、是等会津のむかつく売りもの也、卅六文とハ長劔の智行也、一合もけづらさぬトいふ札付なり、萩の国百万石になる吉凶祝ふなれハこれ商人にあらずといふ、此時浪花ノ悪セつをよむ

〈赤玉もきかぬ時にはきかぬもの上ミハ捌けず下へくだらず

〔絵左上〕将軍都ハ無首尾進発ハ剛し城動かぬ故おい〳〵落書アリ

〔絵右上〕京都焼あとへ店出し買人□　□ことし、おはぎ風味よろし三ツ百文、此日八十貫文売上あり、是一日かぎり〔絵品名板〕

うまいだんご〔絵左中段〕卅六文一文もまけなし〔絵巻物中〕
□　□　一、此度勝手ニ付京都妻の方へ引とり居申候間、御用之
御方様ハ御越可被下候、以上　まつや平兵衛　各様〔絵巻物解説〕
丈長□　□大文字也〔絵右下〕京都□　□とうり□　□此時
□　□城の大□　□うしの□　□〔絵中央下〕慶応うし冬はりか
ミはんし〔絵左下〕行にゆか□　□引□　□

019 長刄考者強勇

慶応元丑四月、将軍大坂トなるゟ城外に木戸出来る、町内〳〵に木戸打、将軍おく病ものとうけわるし、其上あやしきものとらへよと御触まわるゟ此番人何とぞ手がらいたし褒美いたゞかんと思ふ時、新まいこしき見付これをきびしく吟味する、こじき申、われハ左やうのものにあらず、ゆるし下されといふ、番人きかず腕をとらんとする時、こじきふりはなし、番人の首すしつかみ、帯に手がかゝると二間ほど空へ飛び、落てこしぬける、其間にこじきハ行がたしれず、町内ヨリこれをとゞくる、それより又セんぎきびしくなる

初手に手出しをセぬがよひ

〔題字右横〕南舩場八百ヤ町番人加賀ノ産にて釼法よく覚、町内ノ

016

017

018

019

うけよし〔絵右下〕其ころ考者入こミいる事其数しれず、ミな〳〵強勇也〔絵中央下〕長町にてもこじきに会津の士三人打切られ死す、常安はしにても士ィ川へをほりこまれ死ス

020 長刄小瀬川合戦六陣焼く

慶応とら五月、松山侯中の関大しまをのつとりて、広しまに集る諸大名をゑらそふにまねきよセ陣とらす、今宵こそゆるりと休足セんと休ミいる、是長刄ヨリおびきよセん計略とハしらず、酒のミ寝入ばな丑ミつころ紀刄陣のうしろの山ゟ川をへだて、大炮飛来る、此音に目さます、また伊井榊ばら松山別手簇元ミな〳〵火になる、死人多し

〔絵右上〕雲刄街道　広しま道〔絵右中段〕対馬脇坂山かげに陣とる、長刄と同はら也〔絵右下〕此所迄宮じまゟ三り半あり〔絵中央上〕井伊陣死人六十人けが人かすしれず〔絵左上〕榊原陣死人卅八人同〔絵中央下〕もれたる人ハ広しまへにげこみまた〳〵ほり出さる、

021 山ざき伏見淀鳥羽合戦大変

辰正月三日、会津京都へ入らんとする、薩刄いれまじとあらそふ、会津町家へ大筒はなす、大火となり人死多し、会津は平人打事是人情なき男也、大名とは言がたし、これ鬼也、よつておもふ事成就ならず、長刄町人ヲあわれミ給ふゆへ思ふ事何によらず叶ふトいふ也、此時北東風とかわり会津ゟ大筒卅六発放セとも三ばつゟきかす、薩刄ゟ十五放す、是五十発にもこたふる、是神罪也

〔絵右上〕会津悪とうなる生れつきなり〔絵右下〕伏見はし本淀の町家、あわて死す事其人数相わからず、是ミな会津ヲうらみいる也

022 〈薩刄会津〉伏見〈淀鳥羽〉山崎大合戦

会津欲道にまよい修羅道へおちておいまくられ、餓鬼道へにげこみあちらこちらで鬼に責られ、行所なくして今我一人に罪を大あび地ごくへおちくるしむ、これは長々諸国をくるしめしむくひ来りて我レをくるしむといへども中々さんげする心なし、かへつて今利くつばり

〔絵右上〕東堂大はし焼おとす〔絵左中段〕○淀家老降参にて城たすかる也〔絵中〕長刄　柳谷

023 農人ばし谷町井戸凶変

同廿七日暮方より螺吹音する、何事やらんと長家中出て聞ところ井戸の底なり、人々恐れにけ出す、此一町四方のそうどふ大変な

り、程なく清水吹上りてやむ事なし、初夜には井戸鳴止ミ常躰也

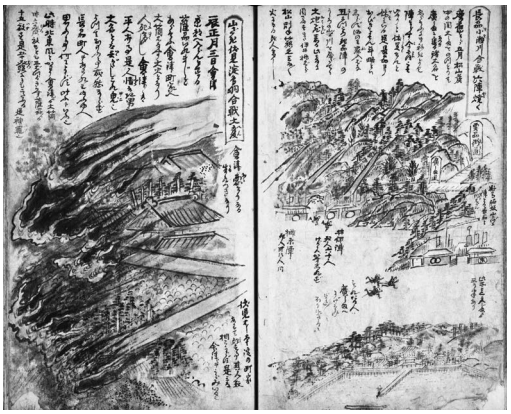
024 外国天罰にて損ず

閏四月ヨリ四十日ノ間、外国むかしよりおぼへぬ大変也、大雨地震雷り津波、此たぐひハ無キ所なリ、此近年日本をおかセしあた人、日本の神々外国江渡り荒したもふトいふ

〔題字下〕閏四月上旬ヨリ五月中旬マテ雨ふるト云〔絵左上〕仏蘭亜〈どろ□る〉廿日の間泥ふりて家うづもれ、水とちがいて難義ながし〔絵右下〕英吉利亜 閏四月ヨリ地より火もへ出、こと〳〵く家やけるといふ、ミな日本の神ばつ也〔絵左下〕北亜墨利伽 五月之間日ノてりなし、くらやミミな〳〵目をまわす也、日輪てらし給ふより津波おこり家なし

025 四丈六尺高水平均

五月十四日より入梅ナリ、此時年数来リテ上元ノ世ノかゝりなれば人ノ心悪鬼のごとし、二百五十年ノ大水年忌ト河劦住連野切の六十一年、米屋こぼちの三廻忌、神国にありながら信薄し、よつて神罪にうたがいなし、此たび切ル所は河内にて五ケ所、北在


020

021

022

023

024

025

別府鳥飼一円の白海ナリ、板鹿野切て中じま白海、瑞光寺家根まて水ナリ、海老江切ル、福しま堂じま小ばしゟ切、野田浦江曽根崎北野白海也、堺大和はし切ル、安立町瓜野家たおるゝ、勝間木津なんば高水也、国々迄辰とし入梅の雨はげしき故堤切レル、七月ノ雨にてまた〳〵先に切れし在所、また〳〵切レル、二度のくるしミなり

〔題字下〕紀ゟ湯浅田辺二丈四尺也、会津山われる、人死多し〔各船登旗〕施行　せきやう　せぎやう

026 灘尼ヶ崎不思儀

同五月廿三日、水最中老人灘ノ酒ヤに来リ、上酒ヲ好ミ壱升徳利に五升求メかへりける、あるじ申ハ是流行の切支丹ナリ、神戸交易場へかへる也、男二人見へがくれに跡を付さす所左ハなくして尼ヶ崎へかへり、濤波（ママ）に向ひ拍手打、龍神祈るてい也、それより右之徳利十町計沖へなげる、徳利ハ波の上に浮キアリ、ミな〳〵是に目をとめる内老人ヲうしないける

027 外国の邪法日本に禍ひす

芸ゟ若との新帝浪花へ入たもふ其後にて死去ある也、細川片目にて強勇、大殿ノ舎弟也、新帝浪花より都入之時ヨリ病気にて送り給ふ事なく死去ある事、是等皆々亜ヘン田葉粉の毒気まわり殺す事日本に沢山あり、此ためしあれは大坂へ触出る也、此悪徒ども天草にて四千人とらへ多勢なれは大名〳〵割付にて御あづかりト成ル、此異物ハ外国ゟ譲り受る也、譲りし国白状におよぶ、それゆへ用ひし異人も土ゟ岡山芸ゟ細川痛ミと成、異国人大事にいたセしゟ長ゟ騎兵たい毛利ヲ見かぎり皆々会津へ味方セんと立こへける、毛利殿父とかわり異人打とらんト帰国セられける

〔題字下〕切支丹〈北国紀ゟ〉天草に流行トいふ〔絵左上〕アヘン田葉粉ニテ誓去アル〔絵左下〕外国悪徒ども

028 陽中の陰

五月ヨリ薩長会津へ勢イ操出し大坂政事うすくなる時、また〳〵悪徒出て往来の人はぎとりの賊多し、人気あしく、両替の欲心より銭金のとり引乱ぼうも政事なし、日暮より往来すくなし、京都ハ豊なりといふ、五月十二日、入梅の雨はげしく在々やゝもすれバ堤切んとす、鐘太鼓の音村々集る事寝るものなし、雨ハます〳〵降る事登りつく如し

029 会津のおしがり

五月節句後ゟ大坂大名藩中東へ勢くり出しも有、国へ引とりも有、

大坂町〳〵ニ侍すくなし、町まわりもおこたる、此時ヨリ昼中に浪士入来りて、我ハ会津也、主命にて大坂へ来り路用切らセし也、百両計り借用下され、帰らハ直さま返済する也ト無利に出さセける、左なくバ打切らん勢イ也、是におそれ大金いだし帰しける所数多アリ

〔絵中央下〕岸和田郡山町まわりおこたりを考盗中の強盗是なり

030　兵庫切戸町唐人ころし

三月以来宿いたセし賃と、こをり其上取かへもの有、交易場へかへり払なし、再度さいそくいたセどもかへつてなじる、正直なる男もいよ〳〵かんにんならず兵庫へ来らバ目にもの見セんとまつ也、はからず神戸より来る、また〳〵さいそくすれバ覚なしといふ、そバなる斧をとるゑはやく頬ら打んトす、はづれてあたま鍋ぶたのことくかけて飛ぶ、咽笛打てとゞめさす、それより女房と末子連ちくてんして行方いまだわからず、諸国江人相書出し長ノおたづねト成ル、是土佐ノ国へ落るト云、異人にさまたげいたす者朝敵同様ト触有ル、其中にて異人ころしハ是日本ノ強勇トス

〔絵右上〕大工にて作料ノ外に取かへもの鉄ぽういかれ其意趣かへし也〔絵右下〕同し日本にありても異人これをしらねバ訴人す

026　027

028　029　030

るものなし〔絵中央下〕異人あたまかけてとれる、とゞめも此さま也

031 岡山代替り諸士もめる

諸藩中申合セ隠居セし備前守殿に付、此殿に従がわぬ也、家中ミな〳〵いんきよいたし、二男三男出さんと一国動乱ス、是ゆへ当殿は我カ家来連上京いたされ御心労なり、是一万石をあなどり信濃侯にハ付かず、此備前守殿強将といへども一ツはしかく成り行をこゝろよからず、それゆへ朝より御うたがいにて隠居いたされける、家中此人に付て当殿につかされば朝より御うたがい倍増す、一国ノいたみとなる事しらざる也、因ゑにも一ツはし縁者たれハ隠居する也、伯ゑ当殿すわり十四才也、水戸兄弟内ミな〳〵若いんきよ申付らるゝ

〔題字下〕分家池田信濃守一万石也、此たび相読する、卅二才ト云

〔絵各人横〕瀧川監物八千石　伊木若狭三万五千石　池田伊賀一万五千石　池田出雲二万石　池田弁之進一万石〔絵中央〕「五千石以上ヨリ百石足がる迄直参ノ者壱人もことバ違ハず当殿ヲはびかんとする也　「これら則国乱のもとひなるべし

032 〔無題〕

肥前御女中方国江引とりにて東都ヨリ浪花下り賑わしく買物にて若とう小者連る計豊也、会津申けるハ西国大名いか程責来る共相人にならず、憎キハ東国大名どもなり、こと〴〵く落してまわり東国ノ主トなるべしト堅ふ成りいる也、それゆへ東堂井伊大垣、裏がへりし大名ヲにくミいるトいふ、これにまじり芸ゑ肥前薩土長ヨリ勢くり出し、井伊大垣にまじりてたすけたもふ也

〔絵右下〕東シ合戦に会津大将分ノ首三つ、壬生浪士悪浪士ノ首十六、都へ戻る、皆これ強勇ノ者也、長ゑ藩ゑ送るト云、細川ヨリ実検ナリ〔絵左中段〕閏四月廿二日、浪花庄内蔵屋鋪封印付トなる、是レ細川侯ヨリ庄内と申合セ、浪花へ入こむ会津の考者に見せん計略なりとの噂も有ルべし

033 大垣庄内ヲ焼討す

閏四月十五日、会津庄内江押寄、庄内城とられ殿ハ外江移リ明わたす、此城ヲ出丸として会津堅メる時は盤石の如く也、それゆへ長薩広土是にあたらんトする時、大垣薩土長にむかい戦ふ、大垣敗ぼくして庄内城江にげ入て加勢乞ふ、其時城内ヨリ会津忍大田喜薩長軍にむかふ、合戦最中大垣ハ庄内城に火を放し焼立、会津の後ゑ大軍にてはさむ、軍敗れる、中々大垣のはたらきゑい

よ〳〵会津よわり降参ノ噂高し、和の宮ハ田安に入給ふ、母公貞昌院ハ本丸にて尾劔これを守護す、一ツはしハ水戸に入ト云、東都ハ是にて納る也、是ミな談合也

034

朝庭ヨリ百五十万石墨附也

閏四月十五日、御墨附頂戴いたし親殿と引かわり御所江参内御礼也「此前日筑前モ下られける、東都蒸気船にて立去りし旗本一万騎寄来らんもはかりかたしと国の堅めに帰国也、江戸本丸ハ尾劔在城なり、加奈川ハ鍋しま侯堅めたもふ、関東ハ和順ト云、今会津ト退出セし旗本而已にて外にうれいなし、程なく亡ぶる色あらわれたり、会津勢越後新潟江追イちらされ越後ノ国ハ走動ス、此時肥前芸劔勢三千人宛操り出し給ふ、土劔長劔も同勢ィ出しける、父ノ殿ハ上京引かハりたもふ也、此時東都ヨリ蒸気船にて乗り出セし旗元九劔乗まわるヨリ西大名ミな〳〵下りたもふ也、

へ熊の膽はにがし砂糖ハ甘たるし鰹ハ堅しまだも牡丹餅

〔絵上〕宍戸侯〔絵右下〕〈毛利長門守毛利淡路守〉両侯下り諸国人気直りし所父大膳大夫侯に申上嬉びを伝へたもふ也〔絵左下〕砂持町中の人ン気申上ける

031

032

033

034

035　水戸侯ドロンス国ヨリ会津に味方ス

慶応元うし五月ヨリ水戸侯行方しれずなる、同勢五十人計にて亜墨利伽江着いたされける、それゟ仏蘭亜大小ノ国々廻り利害をもつてなづけ、今ドロンス国ノ皇と成り下をよくいたわる也ト云、日本にて会津朝敵となりたる事聞より直さま軍舩いだし何故朝敵なるヤ但したる上味方すべしと会津江書を送る、是外国にいながら会津に勢付る也、今伊達預りと成、軍しづまり有といへども悪かしこき会津なれバ気をゆるす事相ならず、新帝には会津ハ亡ぼすへしと怒り給ふといふ、其内仙台ヨリ会津連参内の噂も有也、申開らきのすしもあるよし也

〔題字下〕ドロンスにて軍□　□評義まち〳〵也〔絵中央〕水戸少将との外国に住居ス〔絵下〕是水戸嫡男一ツはしノ兄也、元治ヨリ慶応元二月まて隠居死去後、武田高雲斎田丸主水に責られあやうき時、先将軍にたすけられ江戸へ引とられし恩にて徳川のかたもつ也、高雲ハ長刄にあれハ是敵の根元也〔絵左上〕会津ノ国江毛利〔ママ〕様二百人同勢にて入こみ応対最中也ト云

036　福山侯毛を吹て疵求むる

同正月、騎兵隊に責付られ降参して城ハ都ノ御意くだる迄芸刄ヨリ留主居入レ有也、此時福山ヨリ芸刄の若君十才なるを所望する、しからば落着の後談合すべしと申セども、しきりに家老三人来りて決着の日を定メんト入来る、三人之内壱人会津の老臣といふ事見らるゝ、家老典膳智勇なれバ返答に福山侯江進上するとも会津とハ取引ハいたさずとト云はなす、三人赤面して退出いたしける

〔題字下〕芸刄へ跡目を乞ひ味噌つける〔絵左上〕会津となれ合しと見られ、後ニ福山落城を引出されたり〔絵各人横〕芸刄家老荒尾典膳一万五千石強勇　福山家老海野善左衛門七千石智者　同林主水五千石勇臣　会津老臣堀内左司馬強勇

037　信刄にて会津〈四万二千の〉勢敗軍ス

閏四月上旬ヨリ甲刄へくり出し乱ぼう、十三日信刄小大名にあたり味方にセんたくみ也、松〔ママ〕城主会津に向ひ戦ふ所へ東藤来れども両勢とも敗走ト見へたる所、大垣来りてこれをおさゆるトいへども大勢なれバむつかしく見へたる所、井伊うしろゟ揉ミたつる、会津勢よわりたる所、横間より長刄ノ旗おし立責来る、左リゟ薩刄芸刄土刄大勢となる、是ヨリ井伊大垣のはたらきつよしといふ、大勢打とり分取、越後新潟へにげこむ、新がたゟ早打おい〳〵都へ来るといふ、会津味方四万余の勢ハ姫路若刄桑名旗本其外浪士沢山ト申也、武刄忍上総大田喜東都乱ぼうセし集り、浪士其内に壬生もまじりいる也、榊ばら案内して八百人打とるトいふ

〔絵左横〕会津勢わが仕かけ置し大筒にかゝり死人多し、これ天ばつ也

038

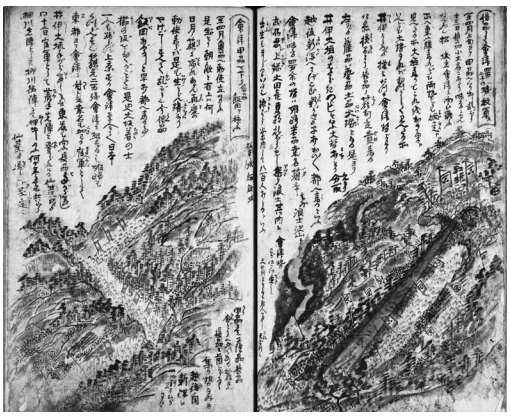
会津甲劔を下り信劔飯田ヲねらふ

閏四月、奥劔へ勅使立たもふ、是生とり朝敵と有上ハ何日月ノ籏に恐れあらん、再度の勅使来らバ是も生どらん勢なり、やけごしすへて乱ぼう也、今信劔飯田あぶなしと早打都へ来る事櫛の波をひくがごとく也、是ゆへ大坂着の士一人も残らず上京する、会津壱人にて日本くつがへす也、籏元二万騎会津に組する也、姫路も東都ヨリ会津に付ト云、桑名も加わる、官軍として井伊大垣手がら多しと云、東藤も向ふ、長劔手がら多し、同十二日官軍として荒手先陣と登られける、仙台口ゟ細川先陣として柳川後陣にて押出し給ふ、何ケ年にても兵らう仙台ゟ送らんト義定也

〔絵右横〕松本城、諏訪城〔絵下〕甲劔にて薩劔長劔分どり多くある、籏元長劔に首とらるゝ集り勢なれは越後ノ国新潟江追イちらさるゝ

035

036



037

038

039

長劦屋鋪砂持にぎわひ

閏四月九日ゟ堂しま米市場紙屋中北新地長劦ヨリ御たのみありてざこばおい〳〵はづミ賑ひ也、若殿太融寺にて御上覧あるとてミな〳〵是へ粧ひ出る、道すじ長けれバ見物人山のごとく、長劦之事なれバ我へとこしらへ出る者多し、長劦俟浪花にて人気もかりたもふ故浪花へ英気持セ軍評定わすれさセんが為砂持はしめけるといふ、是智勇なる大将にて軍略ぬけ目なし、此中に旗元一万騎余分とりの蒸気舩に打のり江戸のり出し行方しれず、いつれにてわざハひあらんもしれずと京都より帰国の大名も有り、東へ軍勢くり出すもある也

〈長門屋の灸が利て腰延バし

〔絵右横〕此時甲劦大合戦最中也、信劦飯田城落さるゝト云〔絵中央〕「堂じま地車出る人数凡五千人也〔絵扇中〕人気　砂持　萩

040

南船場〈いつれも此店〉流行なり

辰閏四月ごろゟ西諸大名方浪花入ヨリ家中付てはじめて大坂見る人多し、よつて武器類ハよく売る也、六角ノ日傘、沓、刀、はさみ、はら巻、陣笠、毛の兜ト品々アル、今商内よくするは此店なり「此時触書徳川慶喜降伏いたセし、よつて「朝庭ノ御勘弁あるなれハ諸国一統左心得へしとアリ「長劦屋鋪砂持はじまる市中へ御たのみある人気集り赤ひ繻伴そろへと見へさわぎいる也

〈日の本に沓高下駄に傘さすも無理ならぬ事天が下なり

〔絵下〕いづれの家中もミな〳〵かゝる□□□也、ミな〳〵袖印でわか□　□

041

新帝浪花ヨリ帰都アル

辰閏四月七日卯ノ刻出御ありて枚方御とまりト触有テ、六日ヨリ川すじ舩止メにて両側厳重にそうじいたしける、其夜淀ノ城御一宿にて翌日二条城江御入なりといふ、大坂さむらひ余程へる也、帝また〳〵尾劦迄出御のうわさアリ

042

外国人東御堂参内

閏四月朔日、新帝様東江御出、それゆへ異人参内ナリ、西御堂へは来る事ならず、東へ出て外国人よひよセの触出しける、異人ともけふを嚊と粧ひ三ケ国ノ王参内する、日本人群集する事雲霞のごとし　○日本大小名是にて根打なし、外国にしたごふ事日本の威なき事諸国のうれい止まず、程なく外国にとらるゝト評定ス

〔絵右上〕異人ハやミしてゆく也〔絵右下〕はやし方しやれる

043　公家の突当桜の宮〈岩国や座鋪〉

四月廿八日、久留米侯平戸侯大洲侯此所へ忍びにて申合、家来十人計ツ、也舩にて上り遊びたもふ也所へ中山来る事しらセしものありてそう〳〵舩にてにげかへり、明日一けんまへに金十両ツ、中山広はたへおくる也、あぶなき所なるべし、其後鴻池善五郎畑にて長刄のふれまい大名集りたもふ、閏四月上旬池多畑に細川ふれまい大名より合たもふ也

〔絵人物右上〕中山中納言殿、いまだ大名と附合酒くミかわす事なし、大名さくらのミやト聞より咄しもあれバかる〴〵しく供なくして来れしなり、中々無法にあらすトいふ〔絵人物左上〕広幡左小弁殿、乱国なれハ人に恐れず、気のかるき人なれバ我も同道セんと二人筒保にて馬上なり

044　神国坪はづれどろかき連中

大がらくり品書の種狂言方仕打方に見附られ、手付もとらず早々京都を夜抜、浪花津で色上んとセし所、京都よりほり出されける太夫これなり

へ会津ちもとつてんかちの乱焼刃がねハ裏へまわるなまくら

039

041

043

040

042

044

〔カ〕徳川江はたき仕事の橋かけて一年もたずゑらひ怪我人
人の世話焼蛤りで腹ら痛め赤玉ぐらひきかぬくるしみ
〔絵右上〕新帝ヲ二条城江生どり是ヲ楯に日月ノ旗おし立、十八国主ヲ降参させ譜代におとし、我レ朝庭ヨリ隠居いたし大御所トならん謀計也、一ツばしヲ人形につかふ也〔絵右下〕中山卿と越中ハ明和ノいこん残り有り、大望くわ立また〳〵中山殿に見ならハされ残念〳〵〔絵下〕天利に叶ハぬとハ思ふたれど欲の道にハ迷ひなし、今さらかんにんともいわれハセず、一生にない麁相またしたそうな〔絵左下〕悪龍も時来らず天上の仕ぞこない奥刕の山中へおちてくるしむ〔絵左上〕入らざる所で金かりて其しんぱいでなんにもしらぬうち恐ロしいたくみして何にも角もおれにあぶゼ、よつぽどおれはぬけさくじゃ、第一おれハ軍事ハこのまず、〔ママ〕商内でなけれバ㊐ハ出来ぬ

045 水戸臣二人国退去触まわる

乱るゝ時はむかしゑかゝる事来りある也、慶応四辰四月廿日、智行妻子打捨、国ちくてんす、家老四人目鈴木石見八千石ト云、朝比奈弥太郎五千石二人行方□れず、大坂へ入込ミ居と風聞、水戸□主居より裁判所へ訴へけるゑ町中触書に、是見付次第申出べし、若一宿にてもあらバ急度とがめ申付るもの也ト有、此時会津の考者京大坂へ千人余も入こみ居るといふ

〔絵右横〕かゝる大身建二人退去するいわれなし、御ねがいありてわざと生どられ国ノねがい上ん為の家出と相見へける〔絵右〔朝比奈〕下〕日本に三弥太郎とて強勇のきこへ高き士なり、卅八才〔絵左〔鈴木〕上〕五十才〔絵左下〕安政水戸へ蟄居の使者ハ会津ナリ、よつてしたがわず、悪心にあらず、長刕下りと見へ候、程なく出勤あるべし

046 東都簇元譜代四方八方へさんらんス

四月下旬、朝庭ヨリ仰うけ東都へ出立アル、箱根とまり聞ヨリ江戸中尾刕公江戸焼打と思ひ簇元家来分町家にいたる迄大坂のあわてしごとくこんざつする也、本丸へ早駕付て触わたしやう〳〵鳴りハしづまる也、いよ〳〵本丸へ入たもふトおい〳〵諸式下直トなる、簇元ハミな〳〵蒸気舩八艘にのりうつる、五艘の簇元ハ利害聞わけ上れども三艘ハ聞わけずいづくともなく出帆して行方しれずトいふ
〔絵右上〕町中大変〔絵右下〕尾刕〈江戸〉本丸へ入給ふ　箱根越ヱ

047 西与力内山彦二郎追はなしと成

辰四月廿日、薩刕藩十人計り入来り有無なし諸道具附立封印ナリ、かね〳〵聞あわセありと見へ、不意うたれしなれハ一銭のたくわ

へなく家内ほり出されける、是薩劔分どりにもあらず、内山の行作あしく欲心深キ所、大塩平八郎の意味有かゆへ薩劔ノ手にまかすもの也、残念〳〵「東与力三宅三郎助との誠の武士を見セ長劔気にはまり与力ゟハ上座の出世する也、是そふとふノ時、城代両奉行代官与力同心にげる、三宅ハ一人もにける事なく長劔来る時申けるハ、我代々天下の役人たり、将軍替りたもふとも役人之我々なれども此たび乱戦と相なれバ是非なし、御用あらバ何也ともつかひ下され、将軍余類と思し召バ首はねらるへし、人のごとくにげる覚なしトいわれける

〔絵右上〕実躰に見セかけ運上とりし天ばつ也〔絵中央〕はや〳〵屋しきを立のきめされ〔絵下〕ミれんらしうかなしむ　不意に来れは何一ツかくす間もなし　天ばつ来り其日からこしきどうやう也〔絵中紙札〕十分とり　薩分取

045

046

047

048

048 大坂城時節到来にて焼ル

慶応四辰正月九日、会津こしらへ置し地雷火はゼてあたら名物はだかにいたしける、長劔軍師なれバうかつに城内へのりこまず、あちらこちらさぐり見る内あやしき所へ小筒打心見るナリ、其内放はつする所アリ、此火うつりて城焼る也、是ミな会津がこしら

へ置土産なるべし、日本一ノ悪魔是一人に限る也
〔絵右横〕豊臣秀よし公建おかれし城焼ほろぶる時節到来といゝながら、町人城焼るを見納メとなげく也

049

和ノ宮〈一ツはし会津ヲ〉よび付はぢしめ給ふ

慶応四辰正月七日、大坂にけいたし、八日若山へにけこまんとしてすでに大炮にかゝらんといたしまた〳〵にげいだし、蒸気船にて同十四日東都に付、それより和ノ宮耳に入二人よび申されけるハ、此たび遠路恙なく御着目出度候、風聞にうけたまわれハ、此たびの着ハ一ト合戦あつて敗ぼくして浪花おいちらされ、あまつさへ徳川慶喜会津以下ノ大名小名役人にいたる迄大坂に賊徒の触書也、にげかへる程なれバ賊徒の覚あるべし、我々も徳川也、賊いたセし覚なし、何とて是を洗ひ清めてかへらざるや、はや〳〵徳川ノけがれすゝぐべし、左なくバ両人ノ首はね都へおくるへしト利をもつてはじしめたもふ、今おもひあたるべし
へお一ほう〳〵のていハ江戸までとゞく江戸の湊へ舩つなぐ
〔絵右上〕女ながらも丙午の勢イ広大ナリ〔絵右下〕手づまの仕ぞこなひより大乱となり、日本国中さわがし、賊徒の名を負ひ命おしミ江戸へにげかへりしゑ江戸中わらひもの也、会津今眉毛立もおそし〳〵〔絵中央下〕京大坂を夜ぬけして東都へ居候打なり〔絵左下〕一ツはしハ性にもあわぬ将軍ト成リ一ケ年もたず馬鹿の名をひろむる也

050

〔無題〕

我国朝てきトいわるゝ覚なし、たとへ家名たへるとも、今一合戦いたし西軍ども二泡吹カし、東国武士の勢イ見セんと威ばり信劔甲劔に地らい火ふセ西軍をまちいる噂高し
〔絵横・中〕「会津勢 鳥羽 八わた男山 八わた ノ町 はし本 くづハ 伏見 細川勢かセい 細川陣

051

長劔藩山崎にて手がら

会津へ人足に買とられし乞食隊伏見山崎淀にてかへる、五百人之内百三十人ハ長劔まわしもの、これハ足がる殿へ忠義つくしけいりやくいたし手がらいたし、此たびハミな〳〵三百石ノ士トなる強勇の若武者なり、命捨てかゝる手がらなれバはげしき事天狗之ごとし、命たすかりし会津勢落武者腹へらし、町在のきらひなく押入めしのつかみ食ひ、金銀かすめとり抜身にておどし、賊とも餓鬼とも見ぐるしき事目もあてられずはづかし、思わず主も主なり、家来も日本にはぢふれまふト云
〔絵左上〕長劔はだか武者こじき隊にやとわれし人々なり、手がら多し〔絵右下〕大坂へもどり死□〔絵左下〕会津藩

052

一ッはし将軍〈大坂用金〉三度目

卯ノ正月ヨリ停止はじまり切なしといふ、廿一日にて明、それゟ三月すへより将軍ノちやうじはじまる、是五十七日なり、此内花山院七日アル、米ハます〳〵高し、壱升壱貫百六十文ナリ、町中やけに成り米高おそれず、芝居遊山かまわず銭つかふ也、此年将軍びんぼうして浪花町中江三月間イ五月間七月間イと三ケ度申付る、それゟ町人申合セ将軍なりともあまり〳〵無躰なれハ店しめる也、此用金さし止メける、金相場弐朱壱貫三百文なり、油壱升二貫文付る、諸式高し、是より天下びんぼうして外国ヨリかねかりうける、それゆへ交易とまらぬ也、町人とむかふづらと成り、会津となれあい浪花津黒土にいたさんとたくむ也、是将軍にあらず国賊といふ也、辰としの春を見るべし

へことわりじや気の毒なれとけりもしつさりとては又かねかセいとは

〔題字右横〕用金のことわり〔絵右上〕両奉行町人にはなあかされ将軍へ此よし申上る、松平勘太郎、松平駿河〔絵右下〕長者ハ此時西大名方ヨリ尻おしなれバ将軍を屁ともおもハぬ也、京都へわりふさしこみとふどふ出す事なし〔絵各人横〕なりません、いや〳〵、めつそふな、御ことわり、たしなミなされ、十人両がへ

049

050

051

052

ハこし□　□、ゑいかとおもふて

053

諸国〈おかけおどり〉はづむ

神府いろ〳〵金俸小判木像かいな棺桶人ノ首石降るなり、ゑいじやないかと踊りしあと大変なり、将軍守護職諸司代目附与力同心諸大名方京都ほり出され浪花城にこもる、ミな〳〵此存念はらさんと大坂諸軍勢伏見にむかい大合戦となる、これおどりのあとなり、ぎやつとセいきやつとつきや夜あけのかねたいこトおどる、これわるし、霜月九日夜、一ツはし会津桑名、二条ノ城夜ぬけ両奉行目附与力同心小役人にいたる迄大坂へにげくだる、尾劔公追イ来り降参すゝめる、会津尾劔ヲ打とらんとす、尾劔□　□京都へのほりたもふ、是もスカ也

〔絵右下〕此時分土人形物言ふ、練人形同、神仏境内□人の形写す異物持来り日本なやま□すでにあぶなき所、神のたすけにて事露顕いたしける

054

勅使の自殺ヨリ長劔手あらし

花山院御ことばゑ長劔大丈夫となり今迄は受方にて相人にならず、此たひ花山院申されけるハ朝敵のやつばらふミちらセト聞より長劔ゑ仕かけてれいノ一本やりいだしてふミちらす、紀劔ハ命から〳〵いよ最上へにけわたる、ミな〳〵陣家捨てにげる故分どり仕られ道具なし、長劔へとりし物仰山分どりなり

〈風味よふ出来た団子も堅ふなり東男のお歯に合ふまひ

〔絵右下〕紀劔井伊榊ばら明石松山福山高松、ミな〳〵徳川流れの大名也

055

〈中川一ツはし会津桑名〉帝盗ミ出すたくみ

寅八月、是をたくみ叡山江連レ出し井伊とのへあづけ置キ会津へ引こむ計略、土劔叡山と西坂本に陣かまへ井伊へ使者立申けるハ、容易ならさる義によつてこゝに陣す、かならず案じ下さるなと申入ける、よつて此はかりこともならず、薩土をうらみいる也、元治にハ中山侍従にあへかへされつぶれる、会津も尻の割る下こしらへ、是天ゑ憎ミたもふゆへなり、程なく黒白わかる也

〔題字下〕土劔薩劔これを見付道すしをとめる〔絵右下〕江劔西坂本に道をふさぐ〔絵左下〕薩劔ハ宇次黄檗山ンに道をふさがる〔絵中〕西教寺

056

岡山侯一ツ橋〈将軍号を〉練言す

慶応二寅九月、御所ヨリ一ツはし殿に将軍号下らんとす、一ツはし是ヲ辞スル、実は諸大名ノ心ヲ引見る也、此時備前因劔登りて

是ヲとゞめて申されけるは、今将軍微力にてたもちがたし、後のうれいなからん内はや〳〵辞退なされよと再三申入、しからバとあるゆへ備前因ゟハ下られける、其跡にて中川会津桑名にすゝめられ将軍うける也、是向ふにのぞみあるゆへ也、これ一ツはしを道具にいたし外国に因を結バしよい顔いたし、是国賊とやいわん、朝敵とやいわん

〈徳川の流れにいらぬ橋かけて一年ンもたずゟらい怪我人

〔題字右横〕病ひより気が勝性にもあわぬ天下のぞみ〔絵右上〕水戸二男一ツはしへ養子、日本一のあほうのかゞみ〔絵右下〕一ツばしとの名高き智者トよばれし人も十四代家茂公をはかり我レ十五代となり、外国に身をやつし朝庭のおとろへハしらぬ顔、是外国にたましいとらるゝトいふ也〔絵左下〕水戸九男備前［　］

053

055

057

057 花山院長門の国へ御勅使

同寅五月、京都出立之節、中川ノ宮外に公家十三軒閉門申付、われ西ヨリかへる迄ト仰らるゝ也、自身西にて命捨る御覚悟、御いたわしき勅使ト云、勅命に曰、毛利大膳朝庭ヨリ再度皇太子供奉セよとの使なるに何とて遅参なるや、但シ野心ありや、いかに〳〵と大声也、長ゟ恐レ入申けるハ皇太子様御座近く敵寄来る関

054

056

058

東之無法人なれバ道中いかゞとあんじ延引御免之程奉御ねがいと申ける、花山申されけるは皇太子に向ふハ朝敵也、踏ちらし通るべし、萩ハ強の国ならずやト○

○それ切り立たもふ、此公長劦ヒイキノ御ことバ也、それより花山院旅舘へかへり給ひ其夜御自害にて死し給ふ也、是長劦に威をもたセし御ことバ也、是ヨリ長劦寄手に目に物見セ追イしりぞけたもふ也ト云

〈時来りなれし都を名残にてまた咲かへる萩の下露

〔絵右上〕智仁勇にて七十一才

058 〔無題〕

惣陣松山長劦となれあいわれ〳〵ヲよびよセしと松山をうたがふ事むりならず、是松山に大しまを安〳〵とらセしハ長防の奥の手なり、是に恐れてまた〳〵元ノ広しまへ戻り、しばらくはらのそんじ養生いたしいるなり　○後に是松山矣のわつらひとなる

〈東から長劦ちゞみを買に来りやうつてやろうがまけはセぬぞや

〔絵下〕紀劦陣死人百人余右同断　松山陣百人余　別手組陣百人ノ内三十人たすかる　旗元陣三百之内百七人残る〔絵中〕徳山妙見宮　小瀬川巾百廿間

059 慶応二寅どし米やらんぼう

五月入梅最中米八百文トなる、町中下はたらくものすでに命危し、それより人気より将軍を恐れず食わんかかなしさ役人をけつにはさむ、是公義の政道うすきゆへかゝる大変所々におこる、天下をうらみける也、難波むらこぼち兵庫池田伊丹、此時曽根崎村モ有ル、公義捌ありて入牢手錠町あづけ他参止メ、すなハち平人より是将軍を責る道利なり　○此のち昼中の付火百五十人組といふ、わざととらへられ入牢す、壱人として火あぶりなし、一ツはし会津よりまわし者将軍そしらするはかりこと也

〈人のもの只寅としと荒まわし入梅の命をしばし繋がむ

〔絵右上〕穢多むらに付て町々はし〳〵貧人れき〳〵の人もいづる也〔絵左下〕是則　大乱の元也、禍ひ下からトいふ、会津これを見ならふ也

060 醍醐宮〈宇和じま〉両矣浪花捌

御両所之御かけにてまつ摂劦ハ極楽之ごとし、取締行とゞき、是偏に神国なるが故かくのごとく納るト云、町まわり加役として岸和田矣勤たもふなり、此時外国ハ阿蘭陀南京仏蘭亜西墨利伽也、ヲロシヤ英吉利西ハ一寸さし止メトなる、それゆへに此二ケの悪国会津籏元に近しくいたすトいふ也、何やらモガ〳〵の様

子にてはまだ〳〵軍納りがたし「浪花江津山郡山橘三ケ月大北条此かた〴〵旅宿とり給ふ、姫路降参東都へきこへ、姫じ屋敷分どりしられ、諸家中蒸気舩にて国元へ七日目ににげかへる、食セざれバ皆々餓鬼のごとし云

〔絵右上〕宮方なれども強勇の御方也〔絵左上〕「宇和じま少将殿大坂西番所に居り大坂町中補佐仕たまい静に納りある也、是智仁勇の将たり〔絵右下〕「東都にても薩長土肝賊の高札建ける也「浪花札場〳〵へ願ひノ目安箱出る、閏四月此時銅銭十二文に成、文久銭十六文古浪銭廿四文也

059　060

061　062

061

加奈川堅メ鍋しま俵

四月中旬京都出立ツ有て交易場トヨコハマニ陣すへける、東都中道中すしマデおとろく、また〳〵爰にて軍はじまるやらんと、是むりならず、段々これをしづめ給ひ厳重ニ陣仕給ひ、江戸町中ずい分心おきなく賑わしくセよとの触也けり、是にて東都中神のごとくいふ也、会津ハます〳〵強勢にて東都へ入こみ軍セんと手くバりいたすトいふ事評判とり〴〵なり

〔絵左上〕横はま道〔絵下〕横はま道　東海道　加奈川台　六郷わたし

062

会津藩朝庭へ忠義

辰正月七日に伏見淀山崎の軍破れ悪党どもこと〳〵く落うセ壱人もかげ見へず、九日城内順見薩長ヨリ入来る時本丸ヨリ大の男一人出来る、長刄これをとがむる時、かの男我ハ会津代々ノ家臣たり、此たひ主人ヨリ大役申付られけれども浪花黒土にするハ安けれども我レ一生うかむ瀬なし、よつて其時より主人をうらみ朝ていを思ふゆへ尊公等を待いたり、十六ケ所の地らいくわ残らずおしへ今より善人にかへる也ト、腹十文字にさバきて性名を申、命ハ会津へつかわす也、心ハ都にとゝむるト相はてける、玉造枕山に碑をのこしける　○六月ヨリさんけい人群集する

〔絵右上〕早瀬軍太夫則定四十才、千石、強勇ナリ「地雷火にくわしき男也、これにて城にのこる〔絵右下〕「長薩藩城内順見ノ時強士壱人残りいるナリ、順見をまちいたる躰なり「是日本の神といふ也

063

新帝浪花入御

辰三月廿四日、天保山大筒御覧ある、住よし参詣ある、座摩角力御覧なさるゝ、ミな〳〵公卿大名方とり巻拝する事ならず、しばらく浪花津は都御所のごとく是古しへより聞もおよバぬ珍事なるべし、平人ハくるしき中にも有がたき事ある也、よつてこゝにうつしおく也「細川新帝に偽念うけ、浪花出御中ミな〳〵賄方肥後ゑ銀方なれバ中々大変の金高也

〔絵左下〕芸刄若殿帝留主中京都におゐて死去アルト云〔絵中旗〕天照皇太神宮　京極

064

国と命の掛将基伏見大会

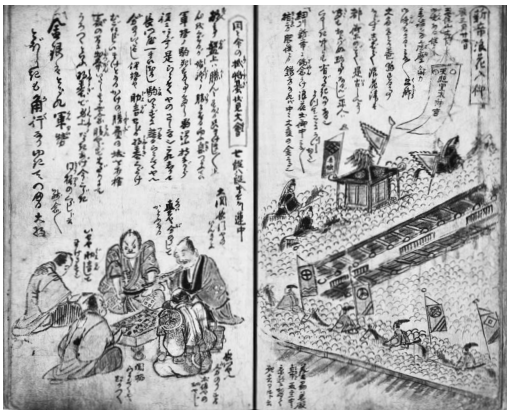
都て盤上ハ勝んとするゑ只まけまじ〳〵ト心をくばるが始終ノ勝とする、向ふ息つよふてハ軍勢ノ駒死する事多し、駒沢山持ながら役にたゝず、是らうそくヤのさし方也、これしりて長門屋一まいおろし駒いらずに詰る、らうそくヤへ分のりいたセし伊勢ヤ助言セしゑ将基くだけむごたらしいまけとなる、かけの勝負の城を打捨、一夜の間に出奔いたし、其無念晴やらずはだかにてうろつくといふ、将基で身上たゝきあげ、今こじき同様のくらしト云、残念〳〵

へ金銀はとられ軍勢とぼしきも角行なりゆきてつまる大将

〔題字下〕七段八段まてなし連中〔絵各人横〕大関長門ヤのいんきよ　長門ヤへ分のりする土佐ヤのおやじ　轡ヤ分のりしてかとふなる　関脇らうそくヤむかつく　いセヤ助言してまけさす也

065 土劦藩柳ヶ瀬常七伝〈廿六才〉

同辰正月ヨリ土劦あづかりノ異人壱ケ国アリ、堺におり〳〵上り遊ふ事あり、これを守護せん為土劦藩廿人毎日がわりに詰る也、此廿日此かた〳〵の運尽たる悪日なり、しらぬ外国舩入来り堺に上り往来する、それゟ土劦藩廿人出て追ちらす、其夕かた守護する異人土劦にけがなかりしやと見まい舩寄り来る、それとはしらずまた〳〵来りしと陸より鉄ぽうにて廿一人打とる、よく〳〵見れば土劦あづかりの異人なり、土劦矦朝庭へすまず其日の出役切腹と定り、妙国寺ニて自害のりつぱなるを見て異人身の毛立に



063

064

065

066

け出しけるといふ

〔題字下〕妙国寺にて十一人切腹ノ壱人也〔絵右横〕異人驚キテにげる〔絵左横〕十一人石碑建てさんけい人多し〔絵下〕箕浦猪之吉〈廿□□〉西村左平治〈廿□□〉異人をうらみたる詞おそろしく、異人とも是にてあとはたすけ下されと願ひ九人助る、内壱人佐川伴蔵十八才、生る事いやかりて舌くひちきり死す

066 猪の獅々武者之助心底

㊀云文久ヨリ以来関白親王家殿上人五摂家金でつらはり、京都

ハ会津ならで叶ハぬと十文にぎりいたりしに、将軍死ゝて一ツばしのたわけものトかわりしゆへ、我レ化のかわあらわれし也、将軍などゝけつあなふとし、我レ日本国中皇土までのまんとたくめども、あほうの細工に外国にうき身やつし、其うへに城異国へわたし日本の地売りわたし、是ゆへ大名どもに穴さぐられおれもともにおとし、おのれハ今よい口ばかりぬかして命おしミわれ一人朝敵といわしてもこれから一ツはしにぬり付最一合戦いたさば、東堂めをあわふかしくれん、これをおもへハ桑名松山はうれしい男じや、それまでのくたびれやすめに今浪人の身の上じや

〈どんな事した跡へも先も引にひかれぬ御所車

〔題字下〕八幡太郎弟、新羅三郎義光ノ後胤也〔絵右横〕奥刄会津廿八万石〔絵右下〕此勢に妓買なと仕てこまそふ、もふやけじや〔絵左上〕すし分どると腹にセひ付てこふかい〔絵左下〕降参して一万石ぐらいで末代はじふれま［　］乗かけた舩じや

067 十一士〈将基詰手〉わからぬへぼ連中

どなたも最少シたんれんセんと長刄つめる事ハ出来ぬ〈

〔絵各人〕若山　大田喜松平織部正　武刄忍　石刄津山　榊ばら　唐津　板倉　雲刄駒なげる　明石　高まつ　いよ松山セんち詰め

068 嶌津大膳太夫侯しんてい

是むかしヨリ強気の国なれバ野心と欲心ハなし、秀よし公に責られ其のち恩あり、また秀頼公真田後藤、大坂ヨリ下り由縁ある故豊臣殿下薩刄にて引おこす心なり、長刄とは心相違する也、薩刄ハ秀よしの物分どりする、長刄ハ欲なりと思ふ、長刄ハ薩刄へ持タしなは一生害埋木と長刄へとり上置也、双方欲心はなけれども豊臣家ノ起し方違ふ也、ミな〈義を思ひ、徳川無利どりの天下なれバ徳川に義利なき大名ハ家康をにくミいたる也、此たび時節到来にて安々ほろぶる事、徳川ゑの大名ハくやしかるべし

〈日本に鳴り響きたる鹿児しまも干割が来たかすこし鼻声

〔絵右横〕家系は頼朝流労之比伊藤祐清ノ娘ト契りける内伊藤ほろぶる、娘懐胎ながらにげのび摂刄住よしにて延生、それゑ薩刄へ下りこれをそだつ、嶋津先祖也〔絵左下〕家老新納武蔵、是ハ嶋津義久ヨリ強勇にてとり上りし家がら也、其時ヨリ地方にて高廿六万石ノぬし也　⊕智行七十二万五千石なれとも日向大隅薩摩琉球四ケ所、高九百八十万石の主な［　］

069 一橋法師のくやみ〈上野へおあづけ〉

心つく今になつてぼやくハおそまくなれど、思へば〈会津といふやつハおそろしい臓袋のつよい生れ付、おれを出しにつか

い六十余劦呑むつもり、言やけんくわセんならずけんくわすりや分がなし、小分か多ひ、しりつ、下馬喰ていたが放れたい〳〵と思へども、おれ放しては芸が出来す、おれもテキ放してハたよりなし、するうち京都にて段々狂言のしりが割れ連中一とうほり出され其無念やミがたなく、西ノ顔役と伏見でけんくわじやひらい也、いかれてまた〳〵無念かさなり、おれも今こふ命たすかり楽なれハ最ふ〳〵あんなやからハともに組で落るどうり、モウ〳〵顔見るもいや〳〵

へ惚てつまらぬ異国の人にすへはからけつ啼わかれ

〔絵下〕○備前の弟ハよい目がねじや、こんな事なら将軍持タずトいればこんなつらい事ハあるまいのう、酒のミとふても㊐ハなし、まい日精進でやセるのを覚へる、寺の事なら好物の女ハなし、生てるかいハなけれども命ハおしく、ア、因果じやナア〔絵中央〕「心からとてこんな所へほりこまれ、よく〳〵おれはびんぼう相と見へるわい

067

068

069

070

070

天下決断所町人集会ス

閏四月ヨリ西番所の門口に間中ノ表札打ツ、持○旦那番頭是に結所として集ル也、此時鴻池番頭伴兵衛といへる人弁舌よし、書画

に能なし、是ヲ持上従四位下に任ス、是醍醐殿ヨリ手をまわセし昇進ナリ、町人手代に官職はむかしゟ無き事也、米喜番頭伊兵衛ハ柔和にして書ハよくす、是もとり上置れしは後に金銀官職の威をもつてくり出させん計略也、主人これをよくしりて二人ともいとま出すといふ、官位高名のよびやうなしと金の蔓切るといふ也、是皆西国大名と持丸腹合セし故ナリ

〔題字下〕商法方ト唱ふ

071 〔無題〕

五月下旬、備中松山板倉伊賀守、一ツはし会津に組し官軍に向ひ生捕られ獄門にかゝる、長く老中家柄国もろともうしなふ事先祖へ孝道の世継なるべし、累代の板倉是を見てさぞ悦びたもふべし、今世界士農工商出家にいたる迄命ハ無ふても金がほしいト迷ひ道ヨリ禍をまねく也、おしいかな、此家退転トしるべし　○此時ヨリ貞昌院大御所ノ御台也、和ノ宮十四代家茂公ノ御台也、日光宮上野宮本丸に入給ふト云、尾劦薩劦これを補佐スト云、

〔絵右下〕宇都宮合戦ニ打死、親子とも獄門にかゝる〔絵左下〕ヲヤ〳〵御老中のごく門だ、めづらしいね

072 東都中炮大火

六月上旬上野宮にむほんすゝめ、旗本勢集り薩劦ヲ打とらんト大炮かまへ扣ヱたり、薩土橋鍋しま勢おしかけてやぶる、旗本勢宮ヲ連レちり〳〵に逃ゲうセて行がたしらずといふ、此時江戸中地震火はセて江戸屋しき町〳〵七部焼失、死人其数しれず、大変也

073 三家諸国御触書

徳川権大納言、是田安息男亀之助どの也、年九才也、一ツ橋中納言ト昇進、是尾劦玄洞様の御事なり、田安中納言ト昇進也、当時清水跡なし、朝庭ヨリ任官あり、此時佐竹庄内言葉違ひにて合戦はじまる、京都には大名〳〵分どりの調らべはじまる、越後新潟にて会津西国勢合戦やまず、加劦より四万人勢くり出すト云

〔題字下〕徳川家名相読七十万石也〔絵中〕徳橋田

074 醍醐殿放埒

六月上旬、兵庫にて女郎引かし、大坂よしや橋築地にては母壱人娘壱人くらすものあり、此娘当十六才にして別して美人也、是目にとまり金にて母を釣りいやがるもの枕かわし、廿両出し親ふ通

に買とりかこふト云、有ル夜、広喜に遊び居る、此時まづしき侍二人来りて座鋪からんといふ、広喜申ける、今宵ハ御武家さまにて座しきなしといふ時、侍申、武家ならハ近付の為よしといふと上る、恐れさせんと醍醐さま也ト云、それなれハ猶よしとずつと通りあいさつす、盃浪士よりさす、諸太夫立腹して作法しらざる素浪人すされといふ早く立かゝり、かたりのまいす者と鉄扇にて二人りのあたま割、にげかへりける

〔題字下〕大坂新地にて芸子引かす〔絵右横〕○諸大夫〔絵下〕此侍二人直さま京着いたし太政官へ願ひけるハ、此たひ醍醐さまの名をかたり色町にてあぶれるもの二人顔打わり御座候間御とゞけ置クなりと下る、是にてだいご殿閉門也

071

072

073

074

075

076

075 旗元浪士敗ぼくす

五月ヨリ越後新潟へ軍集ス、それゟ蒲原郡にて追ちらさるゝ、六月にいたりて上総房州徳川勢としテ行徳辺に勢わだかまる、是退治セんと西国ヨリ軍勢操り出し多しトいふ也　○よく〳〵此勢ヲ吟味ある所、会津にあらず旗元にあらず、是門徒潰れんといふ事聞より百性町人之集り勢大勢にて五大名あぐミはてるトいふ、門徒つぶれる時は生てかいなしト集る也、それ押へんには東門跡

なれば此たび東門跡申付られ北国東国へ下向といふ也

076

佐竹荘内〈是いつわりの合戦也〉

是会津ヲ奥劦仙台江押入レ打とらん計略にて同国争ひ見セるなり、佐竹申ける〻ハ我ハ官軍ヲ手引する庄内を打とる也、貴君ハ仙台の下地に従ひ身をかくし給ひよき折を知すべしと、うま〳〵あさむき双方化粧軍始メたばかり、会津ヲ手ぬらさず仙台にて打とる手段也、仙台には土劦藩先月より大勢入こみいる也、是佐竹上杤庄内のはたらき也

077

越後新潟合戦

是会津ノ士にあらず、徳川七十万石ノ領なり、簇元衆は十万騎也、七十万石にてハ知行なし、それゆへ集リ勢にて乱おこす事ハ是やけすこの乱妨也、京都より西国勢くり出し凡十二万アルト云也、簇元浪士大勢といへども是に叶わずおい〳〵打れ日に〳〵減る、此軍会津懸りなし、諸国浪士壬生ましりいる也、これら扶持放れなれバとるにたらずト云

〔題字下〕同六月

078

長土藩会津退治ス

朝庭ヨリ不興たる会津肥後守、京都御かまひト成りて本国江引とり籠城ス、官軍さし向ケられけれども中々要害よし、此たび東軍会津に一味と見セかけ、浪花蔵屋しき仙台庄内小田原三家、細川ゟ封印付、佐竹庄内合戦いつわりトしらず仙台江入城ス、仙台江ハ長劦土劦立花強勇、五月すへゟ入こみアル、会津一味と思ひ来り手をぬらさず罰セらるゝ事、是神仏の手引なるべし、是にて泰平を諷ふ也

〔絵右横〕強勇なれバ手にあわず、土劦藩首切ル、立花勢〔絵左下〕京都にて獄門の噂〔　　〕

079

川口異人まつり

同六月廿八日、日本に神事なし、外国にハゆるす也、万民のなげきに

〻日本の土ハ異国江買とられ帝の御座はいづくなるらん

是世を観念いたしたる一首也、御大名方の腹には一物ッあるべし、まづ日本の納りをまつ而已也

〔絵中〕日本人なぶらるゝ

080　新堀蔦亀の伝

卯七月、一ツはし将軍ノ時さわりありて入牢す、それより先に入牢する武士あり、牢内にて蔦亀ヲいたわり世話いたしける、極月皆々ゆるしと成りける時、右之武士蔦亀へ来り世話になる、其後中山京都へよひのぼセに付此武士も供ス、此時蔦亀ゟ入用雑用等まかないける、是武士の為には恩人たり、其後京都ヨリかへり一礼のべ、扨亀五郎との内談あれバ人をよけ一間の内へ入、咄しの内に首打事早し、是中山殿ヨリ申付ト相見へる

〔題字下〕辰七月十九日首うたるゝ〔絵下〕此男土刄藩にて先兄中山に従ひし吉村虎太郎の弟也、今の中山に従ひ一日もたすけ置事ならぬトあるゆへ、わさ〳〵首とりにかへりたりト見ゆ、小分三人早ごしぬける、此首芦わけはし番所まへに獄門す、一書そへ行方しれず也〔絵右横〕小兵ノ男也

081　有栖川〈公達〉東都鎮代

信甲飛駿上野下野上総下総武羽常房奥是十三固国也、此国々不承知ならバ是乱ノ元ト成ル、承知ならバ太平を開く基ヒナリ、是故に公達都出し時、成就セざれハ二度都へかへらじト出給ふ、東

077

079

081

078

080

082

都中賑わしく成り今泰平のごとし、有栖川の荷物をい〳〵帰る故京都にも祝ひ也ト云、日本触〈町在にいたる迄八十才以上二人扶持、九十才より三人ふち下さるゝ、金札取引は正金壱両トかへよ、もし違はいあらバ申出よとの仰也〉、東都は別して繁花ト成り、諸式大坂にかわらず平安を賀し祝ふト云也、軍ハ奥劔追イおとされ越後新潟へ海上廿五里これを渡らんトす、渡さじとノ軍也、敵は出羽庄内姫じ親殿板倉軍勢簇元壬生浪士也、凡五万トいへとも兵らうなく次第にへる計也

〔題字下〕東十三ケ国支配として関東江下りたもふ、是辰七月上旬也〔絵右下〕東国大小名これに従ひ日□　□詰かけ下地をうけこれを守□　□

082　米買〆津の伊切らるゝ

八月朔日ヨリ彼岸の入、此日より大雨ふり出し四日迄止ム事なし、其内地震たひ〳〵ゆる也、上在所から崎切口崩れ八軒家浜ゟ高らいばし迄つゞきし石垣つぶし舟にてはこび是ヲ築ク、高槻ノ城水中に有リテ殿モ家中も堤に小家組て水引クヲまち給ふト云、七日朝より侍イ壱人うろつく、浜司ハ是に気もつかず心わるふ思ふうち米直店にて見付られ此ごとく大変也、此日相場建す、買こみ〳〵悪党重り命とらるゝ、此時三千両すくひいる時也、死骸曽根崎村江持かへる、下〳〵のうらみたちまち身にむくふ也

〔題字下〕同辰八月七日午の刻寄場にて〔絵右横〕是長藩にてとくト聞合セ切ル也、天神はしに張紙また〳〵四五人アルト書アル

083　奥劔白川二本松落城

同七□中旬、薩土長芸劔柳川□　□米肥後、人数くり出し〳〵□　□佐竹上杙大田□　□忍其外東国大名とも〳〵軍□すし□　□案□□東国武士はたらきハ西国九劔大名也、此諸軍落テ越後へ渡らんト軍舩こしらへる、是は命から〳〵新潟へ□　□ゆへ也、強にあ□　□榊原勢一万人そんじるト云

〔絵中央〕東国集り勢大名簇元□　□大勢な□　□にハへることなし

〔二冊目表紙〕「幕末明治巷談絵噺」

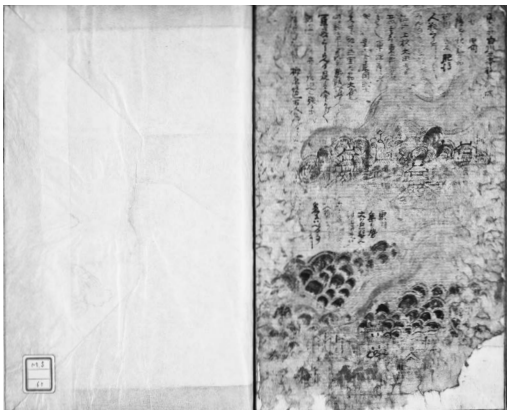
084　初瀬旅宿屋走動

于時明治二巳三月上旬

085　初瀬天満宮夢のつげ　はらみ女の由来

于時明治二巳ノ三月、此女南都にて順見にかゝりそれゟ朝庭より

御扶持方下され大事にいたしやしないある也、此女廿五才ヨリ後家となり美人にあらず見憎からず、嫁にめとらんトいふ人あれども真実の気性なれば耳にもかけず一人リぐらしにて当年四十九才也、慶応三夘ノ正月、夢に菅公とおほしき威相の公家一人ンノ太子を連ていわく、なんじ女ながらも真心を見て此御方をなんじにしばらくあづけ置也、大切にセよと申されける、女夢心に辞退すといへどもたつて捨置かへらるゝ、夢覚てヤレ〳〵うれしや夢なりとおもひ、初瀬の天神江灯明さゝげする内、段々身重くなりて此年巳ノ七月産月トいふつげ也、是三十三月目後家の初産也、此子只ものにあらずと噂□し



083

084

086

085

〔絵右下〕南都役人此女神ノ申子とていたわりそりやく無キやう申わたし、初瀬へつれかへる〔絵中央下〕女ノ家主南都江おめしニ成り褒美もらふ〔絵左下〕女京都ゟ御墨付いたゞく

086 〔無題〕

日本ハ所々外国人来り家移リス、異人はびこり往来ィするとも誰か指さすもの一人もなし、日本ノ弱き事猫に追ハれし鼠のごとし、これにむかふもの朝敵同様の触書出る、それゆへ日本ヲ自由自在にふるまいけり、七部外国ノものと案ンじるもの多し

〔絵中央〕ミな〳〵かけ茶ヤ〔絵中央下〕料理ヤ

087　〔無題〕

巳六月ヨリ川崎金吹場造立、異人ヲやとひ給金いだし積上る、石工方之異人金つかいこミちくてんする、此かね吹場ハ亜墨利伽にても仏蘭亜ニテモ大半作リテ此ごとくにげる故これ虚也、日本モ異人之芸にかゝり

088　〔無題〕

大和国寺々砕キける人数ハ日本ノ料人首輪ノ徒也、勅命ト唱ヱ五ケ寺ノ古寺こわす、こゝに一ツノ庚申堂アリ、是にかゝる時ふしぎなるかな荒廟なれとも奇瑞アリテ是ニかゝりたる人足ふるひ付あるいわ怪我人多し、何等の事ありてかゝる古キ地なる宮寺を発したもふやわからず、是にて日本ノ神祇いかでこれをゆるし給わん、誰から出て誰がこれをうけつぎかゝる乱妨、何ゆへ宮寺邪魔になるや

089　〔無題〕

巳九月上旬、摂刕尼ヶ崎城主〔ママ〕遠江守公、当年十九才ト云、何事も諸藩中之所行よくしり玉ひテ此たび近習二三人にて折々歩行ある、田畑する百性にかる〳〵ト物言かわし座して咄し仕給ふ時、付々これをとがめ、殿さまそれにてハあまりかる〳〵敷ク威光うしなひ給ふト云、殿、我レ領分ノ百性に物云て威を失ふトなれは今日ゟ物いわす、さすれは各々も我ヵそバにあつて用なし、今日ゟ目通り叶わずト申されける、是より色々と領内江きこへ、有かたしと悦びかつほぶしを殿さま江献上する、殿悦びたまひ近習郡代奉行小役人集メテ、今日領分之者ヨリ我に送り物くれたり、此品ヲ一本〳〵其所江工風して立て見るへしトある侍衆殿ノ御意なれども両方細きもの立べきやうなしと云、殿わらひ給ひて則これ尼ノ領分ト同じ事也、上ミト下ト細りたるゆへ中ふとし、それゆへ立ぬ也、是より立やうにたのむ也トなミだ流し給ふ、それゟ運上とる人なし、諸家中はじ入ト云

〔絵右下〕玉子ノ運上とまる

090　〔無題〕

是徳川慶喜弟にて十才ヨリ仏蘭亜に入て学問す、是大将トして桑名姫じ父子長岡備中松山ミな〳〵残党也、都合十二大名ノ浪人此中に浪人数多入こみ官軍相人に旗上す、是一ツはしノ存念トして世界さわがし悪逆トいふ也、程なく天罪有べし

〔絵右上〕奥刕箱舘軍勢十一万余仏蘭亜味方して

091 〔無題〕

巳四月十日、越後路に紀伊阿波薩土長佐竹陣する所、浪人集り勢いづくより廻り来りけん、陣々に火をかけ鉄ぽう打かけ〳〵陣中さわぎ出セば脇より大炮打かけ責詰〳〵だまし打にかゝり死する事数多也、浪人とも手はじめよしと引しりぞきける、それより薩長ゟ五千人宛くり出し追イ〳〵東江乗り出しける、是ゆへに浪花津は諸式高く難渋人おい〳〵出来る也

092 〔無題〕

巳九月上旬ヨリ京都ヨリ東京江官女女蘿達出立アル、朝庭様御かへりト思ひノ外京都ハたん〴〵と淋しくなり、是に付大坂モすいび也、西国九国ノ大名方宮ヲ思ひ東北に向ひ味方郎等をへらし合戦にはたらきしかいものふ、帝江戸ニ住たもふ時は労して功なしトいふ也、今おだやかなりトいへども是手はづ有ル事か、居心よふてお帰りないか、下〳〵のこんきう御ぞんじか、何ともあんじらるゝ也、京都大坂ノなげき東京也へ通じる人あるまじ、下ノ世界〳〵

087

089

091

088

090

092

093　〔無題〕

巳九月ヨリ大名小名智行十分一朝庭江さし上となる、其割合にいたし家中も禁裏の守護につかわしける、民ノ目より見る時は是後に乱のもといなりとなげくもの多し、下万民のいたミむかしヨリ稀なる困窮といふ、おい〳〵新らしき大変出来して世は挟む計り也、帝御帰京なき工合にては東国北国大名ヨリ人質ノ形也トミゆ、西国九州之諸大名アンカント是ヲ見捨にいたすべきや、是大乱之端にならねばよしと、平人に軍師多し、武家に軍師なし、商人なりとも弁ト算筆あれハ大禄ノ分限者となる事早し、万民ほそる計り也、うるさし〳〵

〔絵上〕それ〳〵禄付て官軍としてさし上るト云、昔王天下の風なれども今乱国スハこれ乱ノ元なりと諸国なげく也

094　〔無題〕

むかしヨリ内裏女郎も喰にや立らんといふ、ひだるい時もみないものなしトたとへの通りいかなる美人たりとも五穀に放れてハ肉落て袖引ク人もなし、また強将たりとも兵粮とほしき時はしたかふ物なし、仙人の根付のごとし、つゝしむべし、恐るべし

〔絵各人中・横〕㊥天ばつハこわひものじやナア、丸でがきどうしや　㊨いらざらぬ事してのけた　㊩情もちからも有ル事か、さつぱりへチやぞや　㊧姫につちもさつちもゆく事か　㊦桑こないにむがふゆくものか

095　〔無題〕

巳ノ六月下旬、また〳〵諸商人御用金とり立ナリ、是株代となる ト云、米ヤ木ヤ酒ヤ醤油ヤ道具ヤ古手ヤ肴ヤ料理ヤ菓子ヤ糸ヤ下駄ヤ、何によらす商人はのがれる事なし、商内ハ隙なり、少シ有かねハ上ミへ引上られ、ほやく声地獄へも聞ゆるばかりなり ト言ふ、蔵屋敷〳〵ハ大概祭りハ出来る也、浪花氏神〳〵九ケ年おわたりなし、米相場十石八十七両三分トいふ、札の取引也

〔絵各人横〕なさけない世界になつた、徳川の代とちがふて此くるしミがゑらひ、よい事ハ見らりよまい、もう明□見る事なるまい、世のすへしや、早ふ死ニたいナ、京都ハいセこしきのごとく㊤ほしがるナア

096　英国ヨリ三ケ条難題

弘化年干ヨリ仏蘭英国両亜墨ヲロシヤ、日本ヲトロヱハ水戸侯ヨリ内通アリテ弱ミへ差込尻に挟ミいる也、井伊どの日本の内外五ケ国江打明しト見へて日本同士討さセ其虚に乗じて此国をとら

ん計略にかゝり今日本人同士打と相成けり、今明治にしてかゝる難文申かけ、朝庭にては東北残党起リ仏蘭を味方に付奥刕箱舘に旗上ス、遠路なれば官軍ふ弁なる事をよくしる也、英国ハ三ケ条申て日本セまる、是ヲ追ふ事安かれども浮舩すれば箱舘へまわり一ツになり寄来らん謀計也、外国ハミな〳〵申合セトス、それ故無念ながら英国日本に徘廻ス、日本大名一致するならバ阿蘭陀国南京朝鮮琉球ミな〳〵日本ノ味方なれども箱舘片付ぬ内ハ万民困窮也、神国にありながら外道になやまさるゝ事是日本の恥なるべし、よくもおとろへしものかな、ア、残念〳〵

〔絵右上〕岩倉卿薄学也

093

094

095

096

097

法華太政官ニ而宗偏

英国ヨリ八宗つぶし切支丹宗にいたさんとす、日蓮宗アリテワ邪法弘まりかたし、是三十番神唱ヱル故也、それゆへ一番にこれを潰さんとする也「門徒ハ肉食妻帯なれども在家町家にいたる迄仏ノ為なれば命なげ出し成仏する ト心得居るゆへ、法論によれば何十万ともわからず、よつて英国二番ンにこれをきらふ也、それより高野山叡山三井寺金剛山南都法師禅宗律宗浄土にいたる迄出家たるもの其気猛々敷ク大名衆ノ軍間どろしく、皆々心に襷かけて外国ヲとらん勢イ強大イ也

097

098

〔題字下〕切支丹ヲ引公家大名モ有リト見ゆ〔絵各人横〕身延ノ上人　小湊ノ上人　京都還主〔絵左下〕日蓮宗、身延小湊京本山ヨリ出てむかしの安国論引出して読誦教化いたしける、それゟ追イ〳〵かゝる凶変発る事北条六代七代の世とかわらぬを感心いたしける

098 〔無題〕

巳七月、京都にて異人過言ありて亜楚宗弘メさすか、日本ノ政事此ほうへさするか、帝英吉利亜江渡スか、三ケ条難文一ツかける時は軍船さしむけ日本とるべしト云時、岩倉卿、此方にハ好まねも軍船さしむけるとならバはや〳〵さしむくべし、武ノ国なれバ恐るゝにたらず、三ケ条ハ一ツも相ならず早々立去といわれ、異人あんに相違して軍船だけは云過キなれはとりかへしならず、国同士乱おこるといふ

099 〔無題〕

巳八月下旬、英吉利亜王日本へ連来リ、木津川に船つなぎ老職五人浪花津へ上り日本ノ姿を順見ゝニ廻る所、何を見附しやらん、城内かね吹場見まわりけり、爰より蒸気まで川船こしらへ有に、早馬にて東御堂へはしり、爰にも足とめず其まゝ木津川へはしり、王もろとも蒸気にうつり日本ノ地をはなれにげかへる、何を見しそと相わからず

〔絵左下〕かね吹場ノゑんしやう仕かけある事天文にてわかりしやらかへるともいふ

100 〔無題〕

肥刄鍋しまノ長者竹冨大坂にて悪事露顕入牢す、殿ヨリ申付られ米一万石買まわし仰付られける所、大坂にて凡二万五千石買〆ける、此事露顕なり、裁判所より手をまわし、五月朔日気をゆるさセ夜ルからめ捕テ妻子とも入牢ト成リ、申開らき相不立、新牢に押込ム也、此時大坂府に成りたる大熊某あれは、かくもろくもあるまじ、大熊東都役トなり是運の尽キ也、石建潰セしも此人ト云、肥前仲間の落盈レ皆竹留にひろハれ仲間ハミな〳〵胸すかす也、三日ノ朝妻子入牢ス

〔絵右下〕外国江積ム事露顕なれバ命むつかし〔絵下〕欲に踏ミ迷ひ谷へ転ぶもわからぬ愚者いかでか天是ヲゆるし給ふへき、翌日にいたり肥前留主居ゟもらひに出る所竹留トるすい口書違ひにてぶた箱より本牢へくりあがる罪重し〔絵中衝立文字〕是誉理響キ於井〳〵古女迺直左加留也、此人幕下皆々白状伊多志毛ル　欲人亭

101

外国人集リ談合す

文久ヨリ加奈川にて日本と取引はじまり、今明治迄之内、外国の手元日本江費る事中々大金なれば今更止る事もなりがたし、日本は南京国とは違ひ長刄土刄ある内容易落しがたし、其内に外国がむつかし、モウ此上は三ケ条之難文言立にいたし喧嘩いたし勝敗を分るべしと太政官江さし出しける、其文に曰、帝人質トして外国江連レかへるか、また切支丹日本に弘メさすや、日本の政事此方江致さすや、此三ツの願書也、是今日本同士打ヲ考弱身へさし込也、朝庭東都にて大名方ニ印形とり一致して帰京之後異国退治之噂専也

〔題字下〕交易はいつわりにて日本手に入ントスル也

099　100

101　102

102

〔無題〕

巳四月上旬、東在毛馬百性某内ノ持牛、ある日あるじ裏につなぎ餌飼せんとする時、此うしあるじをながめ涙ぽろ〳〵トこぼしける、あるじふ吉に思ひ牛をしかつていわく、おのれ日本たがへし五穀のたすけをいたす役に有ながら、けふに限り食をあたへるに眼に涙ふくむは不吉ツ也トいふ時、牛あるしを見ていわく、今日

本外国のおとし穴に落入身うごきならず、早々外国ヲ打はらハねば今ゟ三ケ年之内国中異国之ものと成ルべし、神々に祈誓なくば五穀実のらず、ゆめ〳〵うたがいたもふべからずト一声ほへて其あとなし、是天に口なしの天変也

〔絵右下〕あるじ驚キしばらくうしをながめあきれいるト云〔絵左下〕朝てい御聞にたつし、此うし京都にのほり其ごとく申て其あとなし、今京都にて扶持付て大事に飼置たもふ也

103 〔無題〕

巳ノ四月朔日、海老江村百性〔ママ〕宅江早朝蔵に入ける、さつそくこれをとらへ〔ママ〕寺に持来り籠に入レ是を見セる、住主これ時鳥なりと餌飼す、どふやらこふやら摺餌につく、此評判高くなりて諸方ゟ見物集り来り寺に押かける、福しま羅漢よりゑび江村迄人切れず続くなり、寺に狂歌発句短冊に書て張りある事百枚計ある也、村中寄り世話方となり

〈思わすも仏法に入時鳥

〔絵中央〕大坂中より見物群集ス、見はじめにて発句狂歌本堂につまる

104 諸宗坊主英国ヲ亡ぼさんト集

日本外国の輪にか、りどちらへとも動く事叶わず、とり餅桶にあし入しごとく、南京国同様に落され事〔ママ〕眼前たり、畜生に因を結び日本の神仏にかまわず、政事方薄く米高に気をくばらず、只金銭のくつたくに年月のびる、それ故難渋人しのぎがたく、夜盗悪根性出る者多し、其日本政事行届かざるを見て種々さま〳〵ト品をかへなやます也、そろ〳〵八宗を潰さんと亜楚宗を日本に弘めんとス、是に乗りたる大名ありと見へて法論となり、出家の心皆夜叉のことし

〔絵右下〕天王寺一舎利江集会ス〔絵各人横〕一ト軍して勝利をわけん　外国のうつむしども目にもの見セん　今日本のよわい事何ちよこざいな畜生とも　おもしろかつておいでたな

105 〔無題〕

巳二月末、江戸堀五丁目五百灘荒助とて、六十目ヨリ前頭へ抜たる角力取也、天保時代ノすもふ取なれは世話人也、宿ヤいたし居たる所また〳〵鮨ヤいたし子なければ十才計りの忰もらひ、当年廿才計り也、女房卅壱才也、荒助五十三才にて死去す、五十日満命日とて頼ミ寺江たのみ法事ス、住主参る、此日よりたがいに宿業にて思ひ合イ是蜜通ノはじまりなり、女ヨリ生玉江参詣かこ

付通ふ、またハ生玉ヨリ通ふ事多し、忰是ヲ箱訴するといへども親の訴人なれハ取上なし、おして三度におよぶ、裁判所せんかたなく捕らへたもふ、五十日入牢の上四月廿七日ヨリ三日ケ間牢屋しき門前に二人ともさらす、是を見る人群集ス、住主ハ徒罪首玉入られ六百日トいふ、女かねは六百日押込メ也、制札の両罪軽からず、恐るべし、慎しむべし

〔絵右〕生玉浄雲寺、浄土也、住僧龍誉上人、当四十一才清僧也、別して美男、宿業にて罪科のかれず〔絵上〕「見限る心はあるまいのう〔絵下〕荒助女房かね、当年卅一才、美女也〔絵左〕「こふなつたらそいとけいでおくものか

103

104

105

106

107

108

106

切支丹弘めんトする

巳ノ五月以来亜楚宗弘めんと封じものヲ街に落し是をひろハセ悪事の種とするなれども、日本には法華経弘まりあれば日本に足とまらぬ也

107

両亜墨利伽困窮ス

安政万延文久元治慶応明治まで凡年数十二ケ年ゝ也、井□□のゝ在世に□□もふける也、其のちより日本人にたぶらかされ

今橋通りのやうなる長者沢山アル、いつとなく交易と日本の女にか、り有銀底たゝき、国にても誰か相人になるものなし、それ故に国は乱なり、只上下とも国王をうらみ困窮今の日本トおなじ事也

〔題字下〕かくのごとし〔絵右下〕欲の間ちがいとはい、ながらかくなりはてし口おしさ〔絵左下〕いらざらぬ事に手を出してか、る仕合セ

108 〔無題〕

巳四月上旬、東都こぼちすもふ芝居とまるふけいき也、太政官米の政事と、かずしんぼうならず、牛込四ツ谷新宿此辺ヨリおこり出しあれる、広キ所なれハ人数多し、よつて役人におそれずはげし、此時本丸焼るトいふ

109 〔無題〕

通力にて空へとぶ連中、風呂ヤ運上鳥、首輪運上鳥、ミな〳〵羽根つよくよく空をとぶなり、其外かすり鳥、まいない鳥、首すじこそバくちゞまりいる也、今欲と分どりの世界なれバ智行鳥にてもつかむ気有ル

〔絵右上〕四月廿三日神戸ノ士立売ぼりにて飛ヒ、よく日松しまにて数多の人に見られ我罪ほろふトいふ、交易掛り上席小嶋彦治郎ト云、大坂てかけの門口にてとぶ〔絵左上〕黒鍬の大将越前福井下タ清水丹波守東都てとぶ噂〔絵右中段〕川崎銭吹役人東都にてとぶ也〔絵中央〕転法輪院三条殿登城、東都にて飛フ噂高し〔絵右下〕横井平四郎京都講堂前にて飛ぶナリ、此鳥打人沢山ナリ、外国トなれあふト云〔絵左下〕大坂金吹大将東都にて飛ふトいふ

110 外国のなミだ

慶応元うしゟ日本おだやかならざるを見て時節到来と考、日本人トかたらひ国をとらんとする所、日本ノ大将慶喜といふもの愚人にて事あらわれ、伏見トいふ所にて追イまくられ、今でハ宿なしと成リ、非人どうやうなれバわれ〳〵もたのに思ふ人ハなし、野にねたり山に寝たり人の軒にたてハとづかれたり、日に〳〵痩るを覚へ里心が出て、嚊がいふた通り日本へこなんだらよかつたニト思ひすご〳〵戻つた、かんにんしてたもや

〔絵右横〕こちの人やうまあ戻つて下さんした、もふ〳〵どこへもいて下さんな、そふして此なりハなんじやいな、いやらしい〔絵上〕ヲ、女房ども様子はなセバ長ひ事、まづ日本江渡りし所なるほど国ハちいそふとも人気さかしく手にあわず、どふやらこふやらはたかにしられ、しばらく長町にいたれどもくふ事ならずもとつたわいやい

111

外国人にげかへる

〔絵中央〕日本にあしとまらずミな〳〵かへる也ト云

112

まじない婆々

巳三月、道明家芝居ノ門ト江居リ此ごとく店出し書付「　」諸病いねむり物わすれ小便たれ、ましないニテ直らぬといふ事なし、あまりふしぎなれハ裁判所より手が入りおとらへとなる、三日ふた箱に繋キ、四日目白状なれバ入牢す、其翌日牢内に見へず、これ切支丹之法にてぬけたりともいふ、いまだかげ見セず、これゆへ亜楚宗やかましく吟味きびしくなる

〔題字下〕切支丹ノ法にて人ヲまどわす〔絵右下〕婆々に見ゆれとも是おやじ也〔絵左上〕直りし病気ミな〳〵あとへ戻る

113

弘法大師ト云ふらす

これも同し諸病ましないする、是は耳に筆挟ミ歌を書キ病気〳〵ノすしにより違ふなり、人ノ軒に立チ人ヲ集メ、真言の唱ヱ持たる木にて腹をおし其上耳にて切リ紙に書なり、是も切支丹トうた

109　110

111　112

113　114

かふ人できるなり、しばらくおとろふトいへどもいまた在世にてまじないす

〔絵右上〕六十才計にて赤頬なり

114

東都流行ことば

明治二巳三月ヨリ誰いふと無く別品といふヲヱライ相生タねト誉る、何事によらず是流行す、関取にて請よい所と、また浄瑠璃にて相生太夫ト両方とも相生にて人気よきヲはやり詞とする也、東都にてヒイキハ鳴雷のごとし

〔絵右上〕ミナト達ノ森改相生〔絵左下〕ナニワ小勝改相生太夫

115

六甲山篝火

巳四月上旬、夜に入りて一時に火の手上る、是西国九国ノ大名方いかなる計略あるやらん、三月中比ゟ追イ〳〵此山江莚づゝみ人数かけてはこぶ、是ミな〳〵大筒と見ゆ、用意とゝのひし夜一時に火の手上る、是におとろき神戸の異人あわて所持の道具舩へはこび

〔絵右上〕西大名、異人ヲおどろかす

116

〔無題〕

巳ノ五月ごろゟ川口異人屋しき徳川植おかれし大樹の松けがれしか、但シ天の機に叶わざるか、三だかへほとの木ミな〳〵并らびて枯るなり、皇土を穢れし外国江売る事、神仏これをきらひ一ツとして悦ふ事なし、末世にいたりあほうの名をとりしは時ノ将軍たり

117

〔無題〕

あゝ天成かな命なるかな、時節到来ノ国乱とはいゝなから日本おとろへしか色々悪魔障化して王国ヲねらふ、同士討ノかた〳〵は国ノけづられもあり国徳あるも沢山ナリ、殖ヱたる方ハ恐悦なれともけづられしハ嬉しかるべきや、是いつしか存念のはれる時あるまじ、後にまたもや世界のわづらひトなる事眼前手にとるごとし、我悪事より国徳けづらるゝとは思わぬハ、これ人間の浅ましき也、皇政事より其おこなひくだけ下万民のなげき多し、いつの世にか御代泰平を諷ふ時来らんト命おわるをたのしミに一日のがれノ時節とは成にけり、捌役人ノ金銭ほしかる事、伊セこじきノごとし、盗賊たりとも首はねず、切られしものハ切られぞん也、何事も金銭にてふセぐ世トなる

〔絵上〕○大名小名方ハ何おもひけん、深きのぞみありと見へて浪

花津へ一粒うものぼし下さらず、これゆへ六十四劦ノ困窮は大坂にセまる、神仏祈るヨリ外なし〔絵右下〕明治二巳九月ヨリ此札通用スル

表　銭百文　以二十五疋　換金壱歩　大坂為替会社

裏　明治弐　己□　券□

118　天王寺屋の古事

浪花に古キ町人これよりなし、太子たくはつの節施物出す後、天王寺建立の時寄附三千両也、それゆへ今に暖簾家ノ宝物也トいふ

「空海上人高野造る時金三百両かし、其証文今に有リ、これ直筆ナリ、これハ善心なるゆへ相読ス、平五ハ是より七百年余後の家がら也、鴻池辰巳ヤかし久はミな〳〵新まい也、徳川十五代につぶれるを天五笑ひいるトいふ

〔題字下〕慶応マテ百卅八代ナリ〔絵各人横〕なんぼうなりともおかし申ト云、しからバしバし借用申也、老子おどろく〔絵右下・中〕聖徳太子ノ筆　弘法大師筆　天王寺屋　天王寺屋

115

116

117

118

119　徳川おとろへを歎キたもふ

徳川家康ハ参劔広忠ノ息男也、幼年ヨリ才智人に肥たりといへとも秀よし土民より出て天下を掌握す、是他年うらみトナリ秀よし病気よりむほん気ざし、我実子秀康秀よしノ養子是ヲ毒殺す、我聟浅野池田ヲ餌にして清正をころし主人たる秀頼ヲ亡ぼし無利取の天下、丁ど関ケ原に似たる伏見山崎乱おこり、東照宮ノ威勢消失見るかげなし、薩長土の威ます〳〵勢イつよし

〔絵右上〕大御所家康公十五代ニ慶応乱出来ィし徳川ノいたみをうらみたもふ也〔絵左上〕新将軍秀忠公なげきたもふ〔絵各人横〕一ツはし　会津　板倉　姫路　桑名

120　〔無題〕

巳ノ六月、越前国栄平寺にて切支丹ト宗綸ノ時出雲ノ国阿波ノ国ヨリ真言坊主出て法論ス、亜楚宗ハ朝ヨリ暮迄に米植付して、五ツ時ニ花盛リ、昼に稲かり、八ツにこなし、七ツ時に米にて見セる、真言宗ハ四斗樽に拾ばい生た鮒入ル、午ノ刻にミな〳〵米となる、これより日本に恐れ「　」る、其時禅坊主大力之もの出てミな〳〵生どる、これ実セつ也

121　〔無題〕

巳〔ママ〕東都鉄ぼう洲に異人屋しき造営なりて帝此所江御幸ありてかへらず、八月朔日いよ〳〵六十四大名付そい帰京ノ噂町々触書出る所、九月なれともかへりなし

122　〔無題〕

巳九月、松平勘太郎大隅守どの命にかけて願出アル「朝庭ィ都はなれ東京に御座を鎮め給ひてより下万民日に〳〵痩るトいへども、公卿大名小名ニいたる迄是に気の付人壱人もなし、程なく下々乱妨におよび切どり分どりといふ時、勘太郎殿一命なけ打積リにて歎願有ル、朝庭さまの御威徳有がたしとは思へとも今眼前下動乱ス、何卒下ノ動心ン我等に御まかし下され、これ鎮さセ下さらば生々世々の本懐と願ふ、上ミにも途方にくれ待もふけたる所なれハさつそく御意下リける、勘太郎どの東都中鎮め今にてハ江戸太平也トいふ

〔絵右横〕東京にてハ神のごとく名高し、程なく大坂ハなしミの地なれバ奉行職に下リたもふ噂高し、世直りハ此人ナリトいふ

123　〔無題〕

明治二巳九月三日未ノ刻、京都西陣ヨリ事おこり乱となる、女御さま江戸行妨んと三条四条五条橋ふさぎ

124　赤子のふしき

明治二巳ノ六月上旬、和泉ノ国百性某内に誕生ありし玉のやうなる男子産るゝより泣事なし、ミな〳〵是おしごろか片輪ものなりといふ、七日目の湯をさしてからだ清らかに成しより水子けら〳〵ト笑ひ、いつれも我いふ事聞置べしと初声高らかと申述けるは

〔絵右下〕我□　□乱たる世を鎮めん為来るなり、今世界穢れしゆへ五穀実のらず、おの〳〵信心すべし〔絵中央上〕我ト同躰のものこれより十三人出る也、よく〳〵心を付て見るへしトいふ〔絵左上〕「一家中にげかへる〔絵左下〕とりあげばゞセつじする〔題字下〕七日目湯の時あらこもにすわり初声ス

119　120

121　122

123　124

125

鞍馬に大天狗集会ス

巳ノ五月上旬

126　〔無題〕

ふじがいつて諸式高㊀　是にて下モ〳〵ハ命あや㊁〔俵等絵横〕五斗四十六貫文、二貫七百文、二貫五百文、三貫文　人足ハ上ゟ下つた酒に㊂　近在の百性ハたひ〳〵にてこた㊃おい〳〵異人屋しきりつぱに㊄　切レ所〳〵のくるし㊅

126　125

高槻のお下の百性は毎日お手㊆　貧ぼう人は米高で㊇　将軍方軍にまけてミな〳〵にげ㊈　程なく大工ハ豊臣乃宮うけ㊉　外国ハ日本に恐れにげて㊋　薩土長㊌

127　〔無題〕

東都江よび寄られし官女達、女藺ミな〳〵顔ゟ惣身種物発し其嗅キ事鼻もむけられず、公家衆数多わづらふ、水のかわりか、但シ外国より手をまわセし毒薬かわからず

127